

九大広報

Kyushu University Campus Magazine

vol. 53
2007.9

九大
至宝

九州大学附属図書館
医学分館所蔵

シーボルト
「NIPPON」



特別企画 東京座談会

九州大学の 新たな百年に向けて

前田 勝之助 東レ名誉会長
田崎 雅元 川崎重工会長
古川 貞二郎 元内閣官房副長官
元村 有希子 毎日新聞記者

インタビュー・シリーズ九大人

秀村 選三 辻 健治

九州大学名誉教授
学士院賞・恩賜賞受賞

林野庁長官

モノが伝える歴史と未来

Kyushu University Great Treasure VOL.3

大宝
九至



シーボルト NIPPON

『Voetvolk, Fussvolk』（歩兵）。シーボルト『日本』より
九州大学附属図書館医学分館蔵

Philipp Franz von Siebold, NIPPON, Abtheilung II, Tab. XVI（初版、図版の第四分冊収載）

アジア政策を検討していたオランダ東インド会社が一八二三年に長崎へ派遣した若き医師・博物学者シーボルト（一七九六一—一八六六）は、通常の医療活動のほかに、日本についての総合的な調査を課せられていた。出島の阿蘭陀通詞、国中の医師、蘭学者、「蘭癖大名」らとの親交を通して、シーボルトは自然界から文化、社会、経済関連に至るまでおびただしい数の標本、見本、書籍、情報などを収集することができた。ヨーロッパへ帰郷後は、一八三二年から二〇余年をかけ、蝦夷地、琉球、朝鮮半島にも力を注いだ名著『NIPPON』を出版し、近代日本研究への道を切り開いた。

一九二六年に法医学教室が購入した初版は、分冊のまま保存されており、出版当時の複雑な流れを示す極めて貴重な史料である。また、詳細なところまで観察できる、三六七枚に及ぶ大型図版の多くは、縮小された第二版以降には収録されていない。

本広報の表紙に使われている『NIPPON』の数少ない彩色版画は、徒士（かち）の絵図を利用したものと思われ、目足（ひあし）紋付の流れ旗、割菱（わりびし）紋付の纏（まとい）、太鼓かきと鼓手及び合子簀（ごうすばし）紋付の四半旗などが描かれている。（言語文化研究院教授・MICHEL WOLFGANG）



特別企画

東京座談会二〇〇七……03

九州大学の新たな百年に向けて

前田 勝之助 東レ株式会社名誉会長

田崎 雅元 川崎重工工業株式会社取締役会長

古川 貞二郎 元内閣官房副長官

元村 有希子 毎日新聞社科学環境部記者

梶山 千里 九州大学総長

進行 柴田 洋三郎 九州大学理事・副学長

インタビュー・シリーズ九大人

名誉教授（学士院賞・恩賜賞受賞）

秀村 選三……17

林野庁長官

辻 健治……23

シリーズ研究・ふろんとランナー

プラズマ観測衛星打ち上げに挑む

工学研究院准教授

花田 俊也

工学府航空宇宙工学専攻

鶴田 佳宏……27

TOPICS

座談会

□キャリア支援センターの取り組みと
博士人材のキャリアについて……31

ニュース

- 百周年記念事業推進会東京部会を設立……33
- 表敬訪問……33
- オープンキャンパス開催……34
- 新理事・事務局長紹介……34
- 福元言語文化研究院准教授に「日本独文学会賞」……35
- USIと熊本県が協定締結……35
- シュタインバイス大学との合同プログラム……36
- 北京航空航大大学と交流公演……36
- 同窓会の話題……37

告知板

□ホームカミング・イン・六本松……38

新聞で報道された九州大学

□平成十九年六月～七月……39

九大生が案内する世界のキャンパス

□ライス大学（アメリカ合衆国）……41

こんな本出しました

□これからのキャンパス・デザイン
□プレゼンテーションの教科書……42

編集後記

□高田総長特別補佐
高山編集委員……42

□お読みになってのご感想やご意見をお待ちしています。

□投稿をお受けします。文字数は、300字未満。手書きのものも受け付けますが、できればテキストファイルのフロッピーディスク又はEメールでお送りください。可能な限り掲載しますが、本誌の目的や性格に照らして不適当と思われる原稿は掲載しません。

■九州大学関係者が本誌記事を転載する場合は、「九大広報第〇号から」と明記してください。学外の方は、事前に事務までご連絡願います。

■「九大広報」は九州大学ホームページでもお読みいただくことができます。

■次号は、2007年11月発行予定です。

特別企画

東京座談会

二〇〇七

九州大学の 新たな 百年に向けて

大学統合、法人化を経て、新病院建設、伊都キャンパスへの移転という大事業を進める九州大学。伊都キャンパスでは、工学系の移転が終わり、二〇〇九年四月には六本松キャンパスが移転します。伊都キャンパスを核とする学術研究都市も徐々に姿が見えてきています。

九州帝国大学創設から百周年となる二〇一一年に向けた記念事業が動き出したのを機に、特別企画として、各界で活躍されている方々にお集まりいただき、「九州大学の新たな百年に向けて」というテーマで座談会を開催しました。世界を視野に入れて活動するリーダーたちの「百年の計」談義から、新しい九州大学を展望します。



座談会の出席者。前列左から、田崎氏、前田氏、元村氏、古川氏。後列左から、梶山総長、進行役の柴田副学長。

田崎 雅元

たざき まさと

川崎重工業株式会社
取締役会長

1958年工学部卒業後、川崎航空機工業株式会社入社。KAWASAKI HEAVY INDUSTRIES (USA) 社長などを経て、2000年6月川崎重工業株式会社社長、2005年6月同会長就任。(社)日本航空宇宙工業会会長、(社)日本鉄道車輛工業会会長などを歴任し、現在は(社)日本防衛装備工業会会長、(社)日本造船工業会会長などの要職を務める。

前田 勝之助

まえだ かつのすけ

東レ株式会社
名誉会長

1956年京都大学大学院工学研究科修士課程修了後、同年、東洋レーヨン(現 東レ)に入社。1987年に社長就任、1997年会長、2004年から現職。経団連副会長、科学技術会議議員、総合科学技術会議議員、日本知的財産協会会長などを歴任し、日本繊維産業連盟会長などの要職を務める。九州大学学術研究都市構想促進東京会議議長、並びに九州大学百周年記念事業推進会東京部会会長。

元村 有希子

もとむら ゆきこ

毎日新聞社
科学環境部記者

1989年教育学部卒業後、毎日新聞入社。2001年4月から科学環境部記者として、科学や文部科学省を担当。2002年1月から「理系白書」キャップ。2004年11月～2007年8月、朝刊コラム「発信箱」を担当。2006年5月には「第1回科学ジャーナリスト賞」の大賞を受賞。2007年9月から英国留学中。

古川 貞二郎

ふるかわ ていじろう

元内閣官房副長官

1958年法学部卒業後、長崎県庁を経て厚生省入省。厚生事務次官で退官の後、1995年2月から2003年9月まで、官のトップである内閣官房副長官として村山、橋本、小渕、森、小泉の五つの内閣を支えた。その在任期間8年7ヶ月は、歴代内閣官房副長官の最長在任記録。

梶山 千里

かじやま ちさと

九州大学総長

1964年工学部卒業。専門は高分子化学。

柴田 洋三郎

進行

しばた ようさぶろう

九州大学理事・副学長

1971年医学部卒業。専門は解剖学、細胞生物学。

社会は大学に何を求めているか

柴田 第三回となります。今回の東京座談会のテーマは、「九州大学の新たな百年に向けて」としました。ご承知のように九州大学は百年記念事業を立ち上げました。

伊都の新キャンパスの移転も軌道に乗りつつあります。まず、数週間前に伊都キャンパスをご視察いただいたばかりの前田会長から、そのご感想などをお聞きしたいと思います。

前田 一年半程前に、建設途中の工学系ゾーンを見せていただき、今回は工学系全部が移転したところを見学させていただいたのですが、非常に立派なキャンパスができあがっていますね。二十一世紀



伊都キャンパスを訪れた前田氏
(中央・H19.7.5)

に向けての九州大学のビジョンを目の当たりにした、そういう感じがいたしました。世界水準の超先端的と言ってもいい「水素材料先端科学研究センター」や超高压電子顕微鏡などは、大学だけで使うのではなく、地域や全国で共同利用していくとお聞きしました。私も九州大学学術研究都市構想促進東京会議議長として、九州大学の移転に関わることができてよかったと思っています。他の旧帝国大学でも同様の動きは見られるのですが、学術研究都市構想を明確に打ち出されて、知的クラスター、産業クラスター構築も視野に入れた高い志を持って広大な土地でキャンパス作りが行われていることに、深い感銘を受けました。

柴田 評価いただきありがとうございます。九州大学を始め、日本、世界の大学が急激に変わりつつある現実があるわけですが、最近、法人化した国立大学に対して、特に経済界から厳しい励ましや意見

が寄せられています。国立大学のミッションは多様性という持ち味があつてこそ実現すると思っておりますが、目に見える成果や向上努力が求められ、それを資源配分に反映させるべきとの意見もあり、特に地方大学には厳しい状況となっています。このような現状に関連して、国立大学協会副会長でもある梶山総長から、まず国立大学全体の状況を説明いただきます。

リーダーを育てる

―大学の課題と貢献度

梶山 九州大学に限らず、大学の存在意義ということでお話しますと、人材育成、そして、基盤・基礎の研究、その二つが大要件だと捉えています。この二つをバランスよく実現するのが大学であり、教育だけ、あるいは研究だけに偏るのであれば、九州大学の存在意義はなくなってしまうと言ってもいいでしょう。

教育に関しては、これまで、果

たして世界で通用する人材を育てる努力をしてきたかという思いがあります。自分の意見をはっきり述べてリーダーシップを発揮できる、社会を先導し得るような人材を育てる意識が十分でなかった。

その原因の一つに、日本の大学始まって以来の学部が、延々と存続していることがあるかもしれません。九州大学では教育組織のあるべき姿として、国際化をキーワードに文系と理系を融合させたリベラルアーツ的な組織、あるいは、イノベーションやものづくりを意識した教育研究組織を模索しています。大学が社会の変化に必ずしも対応できていないことも問題です。産業界がこのような人材がほしいと言っても、変化に呼応した教育や組織改革をやっていないから、旧態依然の知識や能力を持った学生しか輩出できないということにもなりかねない。そういう課題は確かにあります。

しかし、地域貢献という視点で見ると、各地域から国立大学がなくなつたとした時、その影響は量ることができないくらい大きい。

例えば教育大学は、いかに多くの優秀な先生を地域に送っているか、声を大にして言うべきです。教育大学はそんなにたくさんは要らないから減らして、地方へは東京で教育した人を送ればよいという意見もあります。それは違う。地域で育つた先生が地域で教えることが大事なことです。そういうことも勘案して大学の評価をしてほしいなという気がします。大学を評価するのに経済効果という視点は短絡的だと思いますが、一方で、国立大学は国からいただいている予算の三倍から五倍の経済効果をもたらしめているというデータもあるのです。

時代に対応できる 大学づくり

柴田 そういう大学の立場に對しまして、経済界、産業界からは、現在の国立大学、あるいは世界の大学はどのような見え方をしているのでしょうか。

前田 難しい質問ですが、大学の存在意義を考えると、やはり教育と研究、その二つしかないと思います。

ます。人材育成という観点で言えば、教育は、世界に通用する教養、素養のある人材を育てること、研究は、世界レベルの研究者を育てることと、産業界で活躍できる人材を輩出することです。六、七年前、科学技術会議（総合科学技術会議の前身）で、科学技術の基本計画を作るにはしっかりと国の姿勢が必要であるから、まず科学技術の基本的な理念について十分議論しようじゃないかと、かんかんがくがくの議論をしたことがあります。その中で出てきたのが三つのポイントです。一つは、人類の未来に貢献できる知の創造ができる国になろうということ。次が、自分の国を強く意識して国際競争力のある持続的経済発展のできる国を目指すということ。三つ目は、安心安全で非常に質の高い生活ができる国になろうということです。この三ポイントを科学技術基本計画の理念としたわけですが、この考え方は大学にもそのまま適用できます。いろいろな意味で情勢が変化し、人も企業も世界基準で大学を選ぶ時代になっています。



梶山総長（右端）の説明を聞く、（右から）元村氏、古川氏、前田氏、田崎氏。

九州大学もそれを自覚して運営しておられると思うのですが、さらにそれを強く認識して魅力ある大学づくりに努めてほしいと思います。

先ほどお話があった学部の方類の仕方なども興味深いですね。二〇〇三年、当社の基礎研究所に先端研究を行う施設を作ったのですが、社員が「名前を先端研究所としました」と言うのです。私は「それはとんでもない話だ」と言いました。「先端融合研究所」に訂正させたのです。融合こそが現代のキーワードなのです。これは二十年くらい前からの動きではないでしょうか。ノーベル賞の受賞者を見ても、違う専門分野がいっ

しょになってブレイクスルーを作り上げるような、そういう時代になっています。社会に適合した学部の改編や人材の育成の仕方など、梶山先生のおっしゃったことに私は大賛成です。ぜひ、そういう世の中に適応できる大学づくりを進めていただきたい。

柴田 ありがとうございます。大学そして産業界のお話をお聞きしましたが、古川先生はいかがでしょう。

古川 私も大学の使命は人材の育成と研究に尽きると思うのですが、さらにいえば大学の特色を生かして、いかに地域社会に貢献するかという役割認識も非常に重要だと考えます。私は長く行政の中に

おりました。その観点から申し上げますと、大学は社会と共に時代と共に歩み、何処を目的地にしているかという、社会貢献なのです。今の時代、社会は未曾有の大変革の中にあります。例を挙げる

と枚挙に暇がなく、分かりきったことですが、国際化、情報化、中国やインドの台頭、産業構造の変化、環境エネルギー問題も世界的に大変に深刻な問題になっていますし、科学技術の驚異的な進展の半面で、負の問題も表出し始めています。また、少子高齢化、官と民の関係、あるいは国と地方のあり方、具体的に考えていく必要がでてきた道州制の問題も、国立大学の存在と不可分な関係にあり

ます。そういったいろいろな変化の中で大学が社会に貢献していくということを考えたとすれば、やはり大学自体が大きく変わっていかねばいけないのです。

国立大学は、法人化でまさに競争時代に突入したわけですから、九州芸術工科大学との統合、法人化、伊都キャンパス移転の三つの難事業をビッグチャンスと捉えることができれば、九州大学はこれらを非常なプラス要素にできるのではないかと思います。事実、キャンパスの移転にしても、既存の大学が大変革に合わせようとしてもなかなか難しいけれども、新しい理念、新しい考え方で創られる伊都キャンパスが、たまたま



この大きな大変革期に遭遇していると考えれば、まさに梶山先生が言われるようにビッグチャンスなですね。「鉄は熱いうちに」ではありませんが、文部科学省の指揮下にいた大学が、100%ではないにしても、法人化で自由に自律的な運営ができるようになったこの時期にキャンパス移転がぶつかったというのは、これは幸運なことでした。ただこれからの議論としては、関係者がいかに十年二十年の単位で熱意や努力を持続できるか、これには大きな創意工夫が必要です。実行と継続。この継続とということが発展の基なのです。

大学に対しては、「税金を使って何をやっているのか」といった

なかなか手厳しい批判があります。私ども公務員の仕事もそうですが、成果や努力向上が目に見えにくいのです。そういう意味では「こんな研究をしている」と広報誌などで広くオープンにしていただけだと、批判を納得に変えるきっかけになるのだと思います。ぜひ広報には力を入れてほしいですね。

象牙の塔の功罪

柴田 広報には力を入れているところですけども「さらに」ということです。ジャーナリストとして市民代表の立場から、元村記者のご意見はいかがでしょう。

元村 大先輩に囲まれて恐縮して

います。私は新聞記者として科学技術を取材するようになり、大学という組織と切っても切れない縁ができたわけですが、ジャーナリストとしての視点から大学を見てみますと、良くも悪くも大学は「象牙の塔」なのです。「良く」のほうを先に説明すると、大学には社会とは違う時間が流れていてほしいという思いがあります。何も無いところから、人類が恩恵を受けられる知の財産を生み出す作業は時間と雰囲気が必要です。ゆっくりと考える、ぼんやりと寝転ぶ、何となく散歩する時間……そういう何者にも縛られない時間が絶対に必要で、外の雑音からある程度隔絶されてゆっくりと思案を

深める。そういう環境が大学に無くなったたら大学の意味はないのではと思っています。雰囲気についても、過去のすばらしい科学者たちの生い立ちを見てみるといかに大切かがわかります。例えば「ハンガリー現象」というのを聞きになったことはないでしょうか。ハンガリーは二十世紀前半、偉大な科学者を多く輩出していますが、しかも、ブダペスト中心部の2km四方の地区からノーベル賞受賞者が続々と生まれているのです。子供達の通っている学校にすばらしい先生がいて、学問を愛する風土、雰囲気があったというふうに私は想像するのです。そういうアカデミックな雰囲気を守るという意味



では象牙の塔を残さなければいけないと思うわけです。

では、一方の「悪く」のほうは何かというと、外からの要請にともしれば耳を塞いだり、言い訳のような理由で外からの忠告を軽視したり無視したりする雰囲気があります。改まり大学の中にはあるのです。改革しようとする人ももちろんいらっしゃるのですが、守旧派によって潰されていくことが少なくないように感じています。結果として「大学は産業界の求めている人材を育ててきている」とか、「税金の無駄遣い」といった批判に繋がっているのではないのでしょうか。象牙の塔の良いところを守りながら悪いところを変えていく努

力をしないと日本国内ではもちろん生き残れないし、世界においても日本の大学はレベルが相対的に低いと言われ始めている中で、ますます存在感を失っていくでしょう。私は科学技術の取材をしていて、世界をリードしていく人材はたくさんいると感じています。しかし、彼らが本当に生き生きとできる環境を得、社会的な倫理観を保ち続けながら仕事ができているかという点、残念ながらそうではない気がします。第一に先生たちは忙しすぎます。それと、意味のない競争環境にさらされすぎている気がしてならないのです。

古川 元村 意味のない競争ですか(笑)。競争すべきところと、すべ

きでないと場所を切り分けられるよう、大学のアドミニストレーションが防波堤にならないといけないのではないのでしょうか。ちょっと総論的で漠然としていますが、私はそういう印象を大学に対して持っています。

柴田 いろいろなコメントをいただきましたが、梶山先生、いかがでしょうか。

梶山 元村さんが言われたように、確かに今までの大学の考え方が行動の仕方は、哲学の道を歩きながらゆっくり思索をしていくというものでした。しかし、これからもその延長で行くかという点、それはまたもう一度考えないといけないと思うのです。私たち

の行動パターンや思考パターンはずいぶん変わってきているからです。もちろん余裕の時間は重要です。でも、時間があると、私も含め、みんな寝てしまうんじゃないですか(笑)。ただ一方では、忙中閑ありではないけど、忙しい中にそういうゆとりがある、そうしたニーズに大学としてはきちんと応えていかないといけないと思います。

前田 人文社会科学や自然科学も同じことですが、基礎的な研究分野も大事にしないといけませんね。それと同時に応用研究では、国際的な競争が展開されていることも事実ですから、二者をバランスよく両立させることが肝要です。例



えば倫理学や哲学、宗教学、民俗学といった分野の先生方に競争原理の中でやりなさいと言っても、ちょっと見当外れになりますよね。人文社会科学の分野などは特に象牙の塔の感覚が強かったところだと思います。戦後そういう動きが顕著になったのですが、なぜそうなったのかと言うと、やはりそのほうが楽な面もあったのでしょう。でも、競争原理に身をさらして研究をやるうと覚悟した人たちは、それにまっしぐらにやっていかなければならないと思うのです。総合科学技術会議の議員になったばかりの頃、大学の理系の先生方に「大変失礼ながら、特許はいくつ取りましたか」と尋ねると、答え

がはかばかしくないのですよ。特許ということ自身がなにか俗社会的なことであるという観念があったのですね。これでは、やはり象牙の塔的な発想になってしまうのではないのでしょうか。それで大学の方々に「どんどん特許を取りなさい」とアドバイスしたのが、ついこの間の話なのですが、最近、TLOもできて特許取得に積極的な先生方が増えてきました。論文の数の多さもさることながら、最近の特許の数で評価するという傾向もあります。それほどの変化が出てきていますね。百年後、二百年後に役立つような哲学の道を歩く研究も非常に大事です。その一方で、応用研究や特許取得といっ

た競争原理の中で戦うことも重要だということが、ようやくはつきりしてきたのではないかという気がしています。

評価されるための努力 時流迎合の危険性

柴田 大学のあるべき姿を追求する中で「象牙の塔でいいのか」という論議が白熱していますが、田崎会長にお考えをお聞きたいと思います。

田崎 非常に難しい時代ですね。企業の中にも、経済活動に邁進しながらどんどん変化している部分と、時間をかけて一つのことを追いつけている分野とがあります。この場合一番難しいのが会社への

貢献度という観点での評価です。その人の情熱や夢は尊重すべきですが、競争原理を度外視して、ロマンだけというのも現実的ではありません。ですから、それほど短期達成ではなくても、中・長期的に貢献する、あるいは貢献するだろうというものに、なにがしかの評価を与えることがモチベーションという意味でも重要だと思います。しかし、企業にあっても評価の高低に関わらず、「評価をされなくても、我々の理念としてこれはやる」というものも事実あるのです。でも、そういう部分は薄くなってきましたね。

大学の場合は、立场上どうしても国の理念、国家の意思として

基礎研究も大切にすべきです。応用研究は、国際的な競争が展開されていますが、これら二つをバランス良く両立させることが肝要です。

前田 勝之助



社会で生きていく上で、正しい判断ができる市民を育てていくことも、大学の重要な役割だと思う。

元村 有希子

「やる」という部分が大きくなると思うのですが、大学の活動が一般的な評価にさらされるとなると、いろいろ難しい問題が出てくる気がします。そこで重要になってくるのが、私はPR能力だと考えます。日本人はだいたい昔から自己PRが苦手です。不言実行型は良くて、多弁は軽薄。社会貢献は黙ってやるものだ、自分だけ分かっていればいいという気風があったけれども、これだけ欧米型のカルチャーになってくると、自分のやっていることを人に分かってもらう努力が大事で、重要な専門能力の一つと位置づけていいのではないのでしょうか。そういうふうにし変えていかないといけませんね。

前田 今は有言実行の時代。発信しないといけないですね。かなり時代が変わってきているというのですが、そうなると危惧されることです。これはこれで非常に問題です。時代に適合はしなければなりません。研究や人材育成が時流迎合型になったらとんでもない話ですよ。

柴田 それは先ほどの象牙の塔の議論にあったように、少しは社会と距離を置くことも必要だということでしょうか。

元村 大学の中に評価軸を入れていく時に、単一の評価軸だけではなく、複眼で評価をすることはす

ごく重要ですよ。前田さんのおっしゃったように特許を取ること、をためらうような雰囲気は是正されてきたことはすごく良かったのですが、それでも、そちらに振れ過ぎるのも良くないですね。

古川 「目に見える成果や向上努力を提示しなさい」と、各方面から国立大学に対して厳しい意見があるのは、ある意味当たり前なのですが、それが運営費交付金に反映させるといった方向に直結すると非常に危険なことになる可能性がありそうです。目に見える成果を広報することはいいけれども、「目に見える成果を早急に出せ」というのは、行き過ぎると大学の存在意義を変質させかねないですね。

先ほど出ていました時流迎合型は、私は大学の自殺だと思います。大学も行政主体も慎重にやっていたかなければならないところです。

田崎 そういう懸念を生むという点では、評価の基準がない時代ともいえますね。ですから、大学は、評価の基準そのものを生み出すぐらいの気持ちを持つといい。自分で自分の評価を発信するという姿勢ですね。これを業界の基準にするくらいの意識が大切です。多数決で決めるような単純なものではありませんしね。

前田 社会的な価値観が定まらない中で、評価基準作りは難しい。議論してもなかなか結論が出ない訳です。そこで勢い第三者機関に



新たな百年を創造する

頼る傾向が出てきます。会社でも、社外取締役がはやりですが、本質的な価値判断ができる人が評価しないと困ったことになります。小さい時からしっかり教育されたい、わゆるエリートとして客観性や人格、見識を備えた人たち。しかも、ある程度専門分野に通じて本質や

原点を理解している人たちが評価する態勢を作るのが、非常に難しいですね。
元村 おっしゃる通りで、梶山先生が先ほどおっしゃったリベラルアーツにも通じるのですが、社会で生きていく上で、正しい判断ができる市民を育てていくことも、

大学の重要な役割だと思うのです。
前田 その上でできれば共通の価値観を持つように育て上げたいですね。こんなことを言うと、昔の軍国主義的教育などと批判されそうですが、共通の価値観がない限り評価もできないし、社会の意見も出てこないじゃないですか。一

人ひとりが異なった個性を持ちながら共通の価値観を持つ社会の中に、個人の意見というものがあるのです。太平洋のような広い価値観の中で自由に泳ぐイメージですが、それがなければ向こう岸まで自力で泳げないですよ。

柴田 大学の問題、さらには社会の問題とまだまだ議論は尽きませんが、次は九州大学の新たな百年に向けてのご意見をうかがいます。まず、伊都キャンパスの現状やこれからの取り組みを梶山総長からご紹介願います。

梶山 伊都キャンパスでは、〇五年度の夏に始まった工学系の移転が、今年（〇七年）の三月に終了しました。〇九年の四月には、六本松で行っている全学教育などの教育研究を伊都キャンパスで開始します。移転完了は、文系、理学

系、農学系が移る一九年度末の予定です。現在、伊都キャンパスには学生約四千二百人、教職員約千人がいますが、最終的な人口は一万八千六百となります。

今、非常に良かったなと思うのは、移った学生の目の輝きが違うこと。伊都キャンパスに行って、教室や研究室など最新の施設やそこで教育研究している人たちの表情を見ると、大学に来たという感じがします。

元村 今までは何だったのですか？（笑）

梶山 先ほど言われた哲学の道ではないのですが、広く静かな環境



都市型、未来型の伊都キャンパスを
より充実させるために、
百周年記念事業を活用させていただきたい。

梶山 千里

や最新の施設に恵まれ、勉強や研究をしたくなる雰囲気がありますね。伊都に移って入学志願者が減るのではという声もありましたが、工学部の受験倍率は〇七年度入試ではむしろ上がりました。

移転と言っても、ただ学生と先生がぞろぞろ移るだけでは芸がありませんので、移る過程も研究教育の対象にしよう、新キャンパスを科学技術の実証実験の場にしようと呼びかけています。その一環としてキャンパスの一部を高圧ガスの特区に指定してもらい、水素社会実現に向けた研究が世界から研究者が集まって行われています。情報社会の基盤づくりを目指した、全学共通ICカードプロジェクト

も進めています。

キャンパス移転がうまく推移しているのは、地域の行政、企業、産業界、経済界の方たちとの連携がうまくいっていることが第一にあげられます。キャンパスの中にタウンを、大学の周りに学術研究都市をつくるといった構想も含めて、地域の方々にもいろいろな大学づくりを進めています。箱崎キャンパスの入り口には、「用のない者入るべからず」と掲示してあるのですが、伊都キャンパスには塀や門がありません。入り口にある「Big Orange」という情報発信基地には、昨年一年間で約一万四千人が訪れました。そこを

訪ねた方々がキャンパスを回り、「ビッグドラ」と名付けたレストランで食事をして帰るのが一つのコースになりつつあるというのです。いいスタートが切れたと思っています。

様々な人や組織に利用していただけの都市型、未来型のキャンパス、伊都キャンパスをより充実させるために、ぜひ百周年記念事業を活用させていただきたいと考えています。産学連携施設や国際センターが地域や世界に情報を発信し、週末には音楽や演劇が上演され、博物館、スポーツ施設やレストランも一般市民の皆さんにご利用いただく。イメージはふくらみます。

アジアの交流拠点に

柴田 学術研究都市を目指すというビジョンとともに、九州大学の将来展望についてもコメントをいただきたいと思います。

古川 一つだけ申しあげれば、九州大学ならではの絶対的な特色を持つていたきたいということです。百周年記念事業としてアジアの交流センターみたいなものが見れたらなと思ひまして組織図を見ましたら、アジア総合政策センター、留学生センター、韓国研究センター、国際交流推進機構など現時点でもたくさんあるんですね。それらを総合的戦略的に考えていくことが必要じゃないかと思ひま



す。それは留学生にも関係するのです。ちよつと驚いたのは、海外の留学生は九州大学にたくさん来ているのですが、こちらから海外に出て行く学生が少ないこと。留学経験がいかにその学生を成長させるかを考えれば、九州大学のアジア研究拠点化を進めると同時に、九州大学の学生を海外留学させる基金にもどどん投資していくべきです。アジア研究の拠点であると同時に留学生交流の場でもある、そういうアジアへ向けたセンターを、総合戦略的に、百周年記念事業で考えてはどうでしょう。人や物事の行き来には、拠点が必要です。

前田 アジアからの留学生のため

の育英奨学金などは非常に大事です。それと同時に、百周年記念事業の中で、こちらからアジアへ出て行く方々のサポートもしたい。アジアへ行く人たちは欧米に行く人たちに比べてまだまだ少ないですからね。

古川 これからはアジアの時代になっていくと思われます。大学として明確な意図をもって、アジアに留学しようとしている人たちを支援していただきたいのです。

田崎 これだけ情報化時代になりますと、だいたい世界の情報はインターネットで取れるのです。また、ネットワーク型の社会になってきたというのも強い実感です。明らかに個人の能力を超えた研究

開発をする時に、産官学のいろいろなグローバルネットワークの中で効率的にコミュニケーションができる人こそ人財です。例えば企業が多国籍化する時に「マザーフアクトリー」という言葉を用います。そこから外へ教えに出る人もいれば、外の人もどんどん入ってくる。当社の工場などにも百人単位で外国人がいて、これが毎年入れ替わるわけですが、この方たちが、日本人社員と家族ぐるみでコミュニケーションを取るようになったりして、カルチャーの太いパイプラインになっていく。伊都もそういう「マザーキャンパス」であってほしいですね。

開発をする時に、産官学のいろいろなグローバルネットワークの中で効率的にコミュニケーションができる人こそ人財です。例えば企業が多国籍化する時に「マザーフアクトリー」という言葉を用います。そこから外へ教えに出る人もいれば、外の人もどんどん入ってくる。当社の工場などにも百人単位で外国人がいて、これが毎年入れ替わるわけですが、この方たちが、日本人社員と家族ぐるみでコミュニケーションを取るようになったりして、カルチャーの太いパイプラインになっていく。伊都もそういう「マザーキャンパス」であってほしいですね。

いろいろなグローバルネットワークの中で効率的にコミュニケーションができる人こそ人財。各々がアイデンティティーを維持しながら混じり合って暮らすことで心の豊かさがふくらむ。

田崎 雅元



九大生は愚直なタイプが多い。
愚直は美德だが、
自信と誇りと自分の考えを持って話せば、
さらに尊敬と信頼を得られる。

古川 貞二郎

てくれます。

元村 留学生を成功モデルにする
ということですね。

力を示す先端研究 心のふるさととしての 伊都キャンパス

柴田 新しい百年、知の新世紀を
拓くということで、百周年記念事
業を実施するのですが、単に百歳
をことうほくということではなく、
新たな九州大学の百年をどう創造
するのか、そのスタートにしたい
と考えております。最後に、一連
の取り組みについて、アドバイスを
頂戴できますでしょうか。

元村 これは多分誰も思いつかな
いと思うのですが、キャンパス内

に温泉を作りませんか？周辺のお
年寄りと先生たち、学生と留学生
たちが一緒にお風呂に入る。温泉
はやはり裸の付き合いができるの
で、いろんな「壁」を壊すには、
もってこいだと思うのですが（笑）。

田崎 外国人留学生の話を聞くと、
温泉文化は非常に好印象みたいで
すね。いづれにしても、日本専売
となるものがが必要です。

前田 九州は、半導体産業、自動
車産業が盛んです。九州大学は今
度の百周年記念行事で、これらの
動きと連携して力を示してはどう
でしょう。例えば「先端材料開発
センター」。新しい素材を開発し
て世界的なレベルでの展開を狙う。
自社の宣伝になります、当社の

炭素繊維は、飛行機的主要部材と
なっています。元々、九州大学は
化学の分野は強い。そういうこと
を、百年の計という大きな発想の
中で、今回の記念事業でやってみ
てはどうですか。

梶山 私も半導体、自動車、部品
などの産業分野を大学としてきち
んと支える必要があると考えてい
ます。自動車学部を作りたいなど
考えているほどです。芸術工学、
素材、半導体、心理、経済などを
自動車という枠でまとめる。総合
大学の強みを活かした、そういう
組織作りを検討し始めています。

田崎 そこに私は一つ問題点を感
じるのですが、今、自動車産業は
日本をリードしている産業です

ね。ところが不思議なことに、戦
後ずっと大学には自動車工学部や
鉄道車両工学科といったものはな
いのです。では、誰が企業でそう
いうことをやっているのかというと、
まあ造船をやっていた人あたりで
す。だいたい造船、機械、電気の
分野のテリトリーですね。そうい
う事実からいくと、大学は非常に
貢献しているのですけれども、応
用技術は企業がかなり実力をつけ
ています。大学には、企業で応用
ができるような人材の育成、まず
基礎技術をきっちり教えていただ
きたい。企業と同様の目的をもつ
て大学に投資するとしたら、二重
投資だと思いますね。

前田 大学経営の効率化という意



味では、九州の国立大学の統合を検討してはどうでしょうか。アメリカのカリフォルニア大学のように、九州の大学が対等の立場で得意分野を活かして教授の相互派遣や学生の交流を行うことによって、プレゼンスを高める。そうすれば、大学の予算も増やせて研究環境の充実を図ることができそうです。各大学の間で教授の交流を活発化したり無駄を排したり、そういう仕組みを作るというのも一つの展望です。

古川 そこちょっと申しあげたのですが、各国の総生産に占める教育投資率の推移をOECDのデータで見ると、一九九五年から二〇〇三年までの八年間で、日本は四・七から四・八%の微増にとどまっているのに対し、イギリスは五・五から六・一、アメリカは

七・二から七・五に上昇しているのです。ものすごい格差が出てきているということです。国際競争が激化する中で、日本としても手をこまねいている場合ではありません。地方も今、地方交付金の一般的なものは減る代わりに、事業などと結びつけてすばらしい仕事をやろうとしています。まさに創意工夫の時代になっています。地方大学の競争も、当然激しくなってくるものと思われれます。

田崎 私の期待を申し上げさせていただと、キャンパスというのは、そこで一緒に暮らしたことが知識だけではなく感性やセンス、発想、いろいろな視野視点を培う、心のふるさとであってほしいと思うのです。そうしたふさふさを持つていて人は、使命感をもつて社会に出てくる。人間とは思

議なもので、巣立った環境によって発想や使命感が変わるのですね。「自分はここで大変お世話になりました、自信や夢をいただいた。これから、しっかり社会に貢献するんだ」と、一生の心のふるさとなるようなキャンパス。勉強して得る知識はもちろん、問題に対する解決力といった感性をも育む場所。伊都にはそんなキャンパスになってほしいなあと思います。

古川 私は九大生に対していつも言っていることですけれども、自分の考えを持つということ。アドバイスしたいと思います。九大生というのは愚直なタイプが多いですね。私も愚直な人間です。ただ、愚直というのは美徳だけれども、自信と誇りと自分の考えを持つて話せば、さらに尊敬を集めることができます、信頼されると思うのです。

近頃は、大人も含めて耳学問みたいな受け売りでしゃべる人が多いですね。そうではなく、自分の考えを持つ九大人であってほしい。そうした人材がアジアの中核である九州で活躍することで、日本の外縁を広げていくのです。九州が発展するということは日本の外縁が広がるということであり、もちろんアジアの発展にもつながることです。そのためには自分の考えを持つ訓練を怠らない人材であってほしいと願っています。

柴田 本日お伺いしたたくさんのご意見、ご提案をこれから百年の新しい設計をする際の参考にしたいと思っています。本当にありがとうございます。

（この座談会は、二〇〇七年七月二十七日（金）、東京大手町で行われました。）

特別企画

東京座談会

二〇〇七

九大人が伝える

進化文化子
文化子

シリーズ九大人
インタビュー



九州大学名誉教授

秀村 選三

ひでむら
せんぞう

聞き手
木庭 俊彦

経済学府博士後期課程三年

秀村 選三氏 プロフィール

一九二二年、福岡市に生まれる。五一年経済学部助教授。六六年教授。八六年名誉教授。同年、九八年久留米大学教授。

九州文化史研究所（現記録資料館）で近世古文書を収集・保存。石炭産業の崩壊に際して石炭研究資料センター（現記録資料館）を設立し、石炭資料の収集・保存に努めた。

主要編著書は『薩摩藩の基礎構造』『筑豊石炭産業史年表』『西南地域史研究』（十三巻）など。『博多津要録』（三巻）・『守屋舎人日帳』（十一巻）など史料集の編纂も多い。〇五年に徳川賞を受賞。

内村鑑三以来の無教会主義のクリスチャン。ご自分では「一見紳士風、実はワルソー坊主のクリスチャン」といわれるが、日曜日は聖書集会で礼拝、聖書を学ぶ。酒は弱いが酒呑みの友人多く、酒の座では愉快に素面で歌い踊ることもある。

このインタビューは、平成十九年七月十一日、六本松キャンパス図書館分館長室で行われました。

宮中での賜茶の席で 特攻戦死の親友を語る

— このたびは「日本学士院賞・恩賜賞」受賞おめでとうござい
ます。九州大学にとっても面目躍如
たる出来事でした。

秀村 私は今まで一個人のための
ものは辞退してきました。カー
ル・ヒルティが『幸福論』の中で
「義務が汝に命じない限り、名譽
を求めるな。それは余りにも高価
だ」と言っているのを教訓として
きました。高価とは魂を売る危険
と思います。しかし、今度は徳川
賞の時と同様に九大への義務だと
思いました。東大や京大は毎年
のように受賞しているし、東北大や
阪大もかなり多い。九大も負けら
れませんからね。

— 二〇〇四年刊行の「幕末期薩
摩藩の農業と社会―大隈国高山
(こうやま) 郷土守屋家をめぐつ
て―」(創文社)で受賞されまし
た。私が言うとし生意気なのですが、
誰もが関心を持つような華々しい
研究とは対極にあるような、むしろ

る。地味」といってもいい研究で
受賞されている点が快挙の印象を
さらに深くします。特にフィール
ドの選定は大きな決断だと思うの
ですが、なぜ高山郷だったのです
か。

秀村 私が初めて鹿児島県を訪れ
たのは、一九四八年早春のこと
です。薩摩半島の各地を廻り、中世
以来の翳り深い麓(郷土聚落)の
景観に感動しました。翌年大隅半
島の鹿屋へ行きました。旧制福岡
高校から京大での親友が零戦で、
鹿屋から特攻に飛び立ったんです。
名前を林市造君といいます。私は
鹿屋の笠野原を調査し、さらに隣
村の高山は調査条件がよいので林
君の弔いとも思って、しだいに研
究するようになったのです。

— 林氏は出撃前、北鮮で待機し
ていた時分からお母さんにずっと
手紙を綴っていて、今度『母への
遺書』として出版されているので
すね。著者の多田茂治氏は九州大
学経済学部出身とお聞きしまし
た。

秀村 それでね。学士院賞の受賞

式の日の午後、宮中で天皇、皇后
両陛下から学士院長、同幹事、私
たち受賞者二名への「賜茶」(軽
いフランス料理)の席で陛下が
「なぜ高山を研究したのか」とお
たずねになりましたので、日本の
西南辺境地域の郷村の典型として
高山を選んだことをお話し、さら
に親友の弔いと思つて高山の隣り
の鹿屋の特攻基地と林市造と『母
への遺書』をお話しました。それ
と彼の手紙は「Letters to Mother」
といつてナポレオンやゲーテ、モ
ーツァルトなど有名な人が母へ宛
てた手紙をまとめたイギリスの本
の中に日本人でただ一人入ってい
ることも申しました。会が終わっ
てお見送りしている時に、皇后さ
まが私のところへみえて、「ご本
をお読みします」とお心遣いの深

※1 日本学士院賞は、学術上特に優れ
た論文、著者その他の研究業績に対して
贈られるもので、このうち特に顕著な業
績に対しては恩賜賞も贈られる。

いお言葉を下さいました。それで
後日侍従長を通して献上しました
ら、侍従長から「両陛下ともよく
覚えておられて、お読みになると
いうことです」とお手紙をいただ
きました。林君や特攻戦死した多
くの友達のためによかったなと思
いました。

— しかし、親友を弔う気持ち
が原動力になったとはいえ、先生は
政治変革や伝記として残るような
史実ではなく、下人や奉公人とい
う下層の人々を研究テーマのひと
つとされていますね。史料採訪も
気の遠くなるような作業になると
思うのですが。

秀村 確かに私の恩師である宮本
又次先生は私が院生のころ「その
テーマは大変な広がりを持っている
よ」と苦笑いされたのですが、





テーマを変えろとは言われませんでした。後になって先生のお言葉は骨身に沁みるようになりました。ことに、鹿児島県は高温多湿、台風の影響で村の古文書の残存は少ない上に独特の文言で、しばしば弱気になりました。

足で考え、頭で歩く 歩くことは考えること

— 今度の受賞では現地を歩きながらひとつの村に心身ともに没入し、微に入り細を穿って史料を整理・保存し、基本史料は刊行し次の世代の研究基盤を整備する、という透徹した研究姿勢と枠組みが高く評価されたとお聞きしています。

秀村 歩くことは考えることです。以前は今日のように車で行き、マイクロフィルムで全史料を簡単に撮影できる時代ではありません。遠い道を歩いてゆき、古文書を手書きでノートに写すとか小型カメラでとるとかして、帰り道には歩きながら「あの史料はどういう意味なのか」などと考えていました。

た。不便なこともよい勉強だったと思いますよ。古文書も最初読めないですよ。今のようにくずし字辞典や古文書講座などないですから。当時、大学の写字生の事務員に読めない文字をたずねるのですが、三回か四回聞くと、あとは聞きづらくなる（笑）。結局、字体をまねて睨みっこして、全体の意味を考えながら読むという風でした。

史料採訪の極意は 「丁寧にあつかましく」

— やはり史料採訪の話になるのですが、日本経済史を勉強する人間としては史料をいかに見せていただくかが重要になってくると思います。何かこの心構えはありますか？

秀村 私の先生は「丁寧にあつかましく」と言われていましたね（笑）。古文書の扱いや見せていただく相手に対しては丁寧でなければいけません。一方、あつかましくというのは、言葉は悪いようですが、自分では「あつかましく

かな」と思うくらいに粘り強くやりなさいということでしょう。何もかも一度に手に入れてしまおうと思わないことです。私の弟子で財閥史研究の権威で安岡重明君という研究者がいますが、三井はなかなか史料を見せられなかったようです。だから、三井文庫に京都から何度も足を運ばなければならなかった。でも、彼は言っていましたね。「はじめから大量の史料をもらえてたら、ボクの研究はできていませんでした」ってね。ちよっとしか見せてくれないから、その時、その時を大切にしっかりと押さえて、深くものを考えるわけです。そして、粘り強く通っていると、だんだん相手も変わっていくものです。最初から何もかも見せる人なんていない。まずはこの人はどの程度の能力か、信頼できるか否かと、観察するのが当たり前ですからね。

— 先生は行く土地土地の方々としっかりと信頼関係を築かれていますね。

秀村 長崎県に生月（いきつき）

島という島があります。昔、捕鯨をやっていた島ですが、そこに益富家という捕鯨の組主の家があつて、最初、古文書を少し見せてくださったので書き写していました。戦後間もない時期で九時頃停電になる。すると漁業用のバッテリーで電灯をつけて見せてくださった。次に行くと、また少し古文書の数が増えているのです。何度目か忘れましたが、ある日「ちよつと来てください」と言われて、母家の二階に通されたのですが、腰を抜かさなければ驚きました。ものすごく大量の史料です。これは現在も研究を続けています。私は、大学や文書館、資料館などにたくさん史料があるのは大変ありがたいことで、今後益々整備しなければなりません、研究者がそのため安易になつてはいけなひと思つています。苦勞して史料を訪ね、お蔵の中で埃をかぶつて整理し、その土地を歩いてこそ、地域の歴史が実感として身に沁み込んでいるのじゃないでしょうか。勞せず沢山のすぐれた史料に恵まれるの

は、まあ水族館で魚をみるようなものですね（笑）。やはり、外海の魚を追わなければ本当の魚はわからないと思うのです。もちろんそういう施設は大切で、私もお世話になっていますが、それぞれの古文書はそれ自体の生まれた古里のことを考えて、現地に行つてその土地を歩き活用したいと思つています。「先生は大学よりも外で勉強しますな」とよく言われたものです。九大在職中もゼミの学生たちと佐賀県の多久の旧家に泊めていただき、五右衛門風呂を焚き、ご飯も拾い集めた枝で炊いたり、棉を作つたり、炭坑にもぐつたりしました。学問は頭だけでなく、身体ごとやると、本当に体得できるものです。学生たちも生き生きしていましたね。

— 先生の姿勢には一種、文化人類学的な発想を色濃く感じるのですが。

秀村 今の経済史はあまりにも経済一辺倒で実際の社会から乖離しがちです。私は京大の学生の頃から古代の経済史をやりたいと考え

ていました。古い時代ほど社会のいろいろな事象と関連させて考えることが大事ですから。その後喜多野清一先生から一つの村の克明なモノグラフを書くように言われ、家族や生活慣行を重んじるように教えられました。文化人類学的な目はあるかもしれません。

— そもそも、日本社会経済史を志したきっかけは何だったのですか？

秀村 小学生の頃から歴史が好きでした。中学校にもいい先生がおられ、旧制高校には玉泉大梁という歴史の教授がおられて、その先生は日本経済史の草分けの一人でした。私の兄は西洋古代史を研究していて高校在学中は玉泉先生の研究会にいました。私も玉泉先生の研究会にいたのですが、高校二年の後学期には、戦況がきびしくなり、高校三年は半年短縮で大学に行くようになったのです。それで急に大学の志望をきめなきやならない。私は国史をしようと思つていましたが、兄が頑強に国史には行くなという。それは私にも

わからないではなかった。当時の国史の学界は国体史観、皇国史観でお説教のような歴史になっていましたからね。迷いに迷いました。結局、玉泉先生に御相談にいったら、京大経済学部には日本経済史の第一人者の本庄栄治郎先生がおられるからとすすめられて京大経済学部を志望したのです。それは非常に良い選択でした。しかも京都という場所は歴史を考えるにも



聞き手

木庭 俊彦さん プロフィール

福岡大学商学部商学科卒業。
福岡大学大学院商学研究科商学専攻
博士課程前期修了（修士）。
九州大学大学院経済学府経済システム
専攻 博士後期課程在学中。
（主な研究分野）筑豊石炭産業と沿岸
海運業

非常に良く、今も私は関係していますが日本経済史研究所があったり、農史・経済地理学の黒正巖先生や多くの経済史の若い先生がおり、短いけれど本当に良い学生生活を送りました。

良き師を得、真の教育を受けて、教育者としての道を知る

― 宮本又次先生とは九州大学で出会われていますね。

秀村 昭和十八年に学徒出陣で一年十ヶ月海軍に勤務して、敗戦で復員したものの、京都に戻る学資がないのです。福岡の家は焼夷爆弾で丸焼け、銀行預金は封鎖、食料難、焼け跡の整理と畠作り。そんな時、学部長の蜷川虎三先生から帝国大学間の転学はできるからとすすめられ、私としては京大に未練を残しながらも九大に転学したのです。半年ばかりはあまり面白くなかったけれど、二学期になって日本経済史のゼミが始まって、本庄先生門下の宮本先生に会った時、「この先生に付こう」と直感しました。学問より以前に

人柄、人間が合うというか。転学したことは大変な幸運でした。

― 宮本先生は非常に弟子をかわいがる先生だったとお聞きしています。

秀村 明るいし、気さくだし、ちつとも偉そうにされない先生でした。商業史・都市史がご専門ですが、「君の研究の基本は私が指導するが、農村史を研究したいのなら」と農村社会学の喜多野先生、日本中世史の竹内理三先生の御指導も受けられるようにしてくれました。これは大変大きなプラスになりましたね。研究者を育てるといふのはいろいろな学問が必要で、自分ひとりではまかなえるものではありません。これは教育の肝要なところで、宮本先生は研究者としてだけでなく、教育者としてもお手本になる方でした。

民学協同。民衆の中に入って民衆とともに学ぶ

― 先生は今も研究を継続されていますが、現在の、そして今後のテーマをお教えいただけますか？

秀村 中世の下人、近世の奉公人、日雇が生涯のテーマで各地の下人、奉公人、日雇の研究などまだ道半ばです。私は経済学部と九州文化史研究所に育てられました

が、その中で実感するのは、私たちの学問というのは頭だけではなく、民衆の中に入って現地、現場で学ばなければいけないということです。民間の研究者には凄い人がいる。あるいは古老たちの知恵は叡智と言っていいですよ。私は民衆・市民と共に研究することを「民学協同」と言っているのですが、その態度は今までの学問に欠けていたと思いますよ。また現在は、近代はもとより戦中・戦後期の近現代史料がどんどん失われています。日本人が敗戦という未曾有の事態を経て、本当に辛い経験をした人たちの生きた史料がまだ民間の中にいっぱいあるのだから、市民の中に入って共に学び、後世のために史料を残すとともに、老人の聞き取り調査をしようと呼びかけています。

― 先生ご自身も、戦中は特攻戦隊の突撃隊という特攻の部隊にいらっしやっただんですね。

秀村 私は特攻要員でなく魚雷艇に乗り、平戸の近くを基地にして回天（人間魚雷）や震洋（特攻ボート）の嚮導（きょうどう）艇をやっていました。長崎に原爆が落ち、その日にソビエトが参戦したでしょう。その早朝まだ暗い時に湾口の樺島の基地に入港していて、お昼頃に妙な稲妻と雷鳴と思ったのが原爆でした。その夜、急に北の配置につくために司令と参謀を乗せて深夜真暗な海を北へと強速で飛ばしながら、日本はどうなるのだろうと暗澹たる気持ちでしたね。

「運・鈍・根」。鈍でも長続きすれば事は成る

秀村 歴史を語ると古いといわれたりするでしょう。でも、歴史の中に次の時代はあるのです。現代の格差社会、貧困問題などはもう一度新しい目でマルクス主義の思想や諸科学から見直してもよいの

ではないかと思えますよ。私が院
生から助教授の頃は経済学部はマ
ルクス主義一辺倒の時代でした。
私はマルクス主義、唯物史観では
なく複数主義^{ブルラリズム}の歴史観なので、ず
いぶん肩身の狭い思いや覚悟もし

たものでした。しかし私は世界観
はちがうけれど世界観、思想、諸
科学があれだけ体系的に完成され
たマルクス主義は人類の世界遺産
の一つと思っていますよ。
— それにつけても、大きな変革

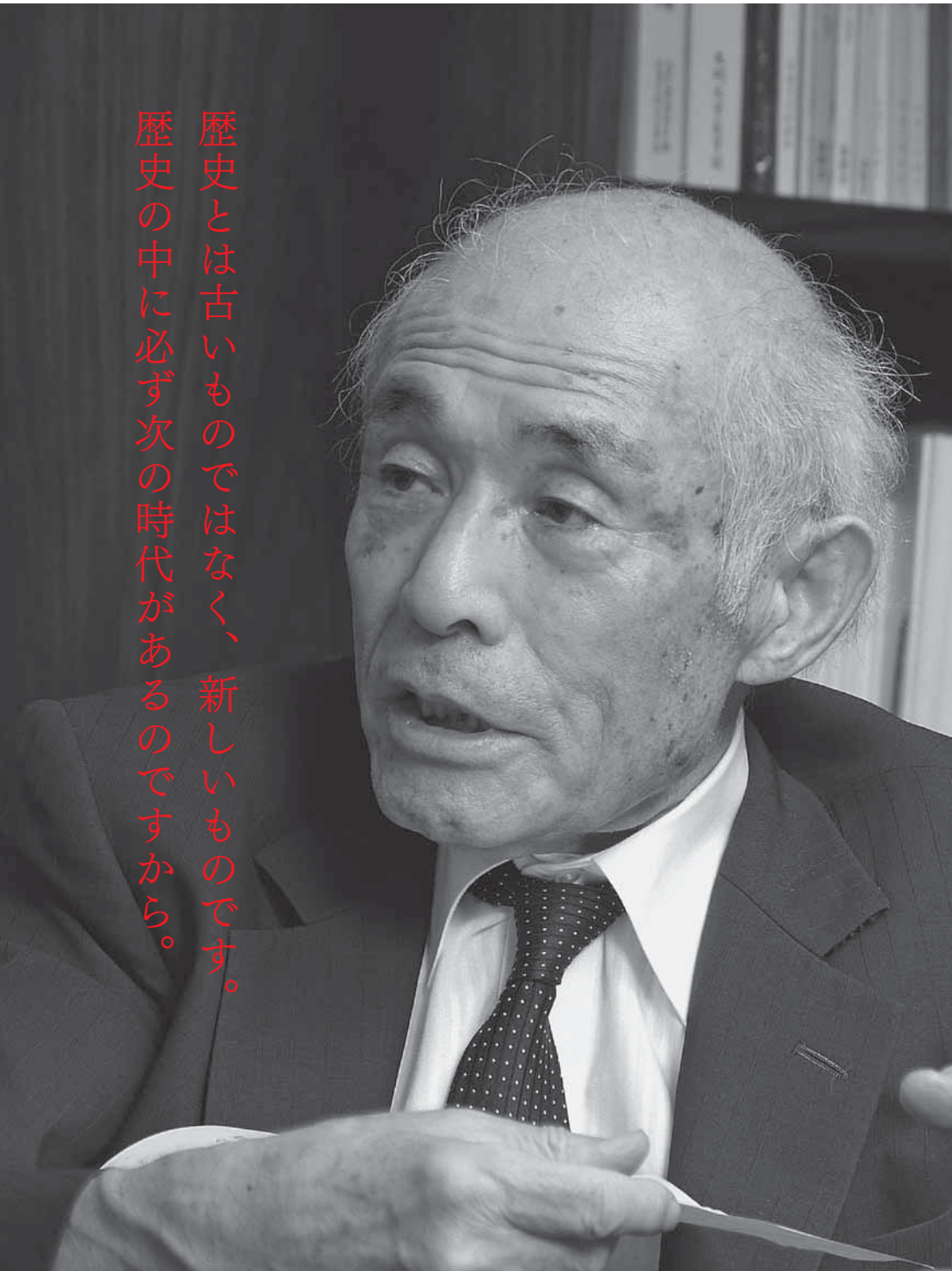
の時代を経験されながら、時流に
翻弄されることなく、信じる道を
歩んでこられた先生の姿は後進に
とって頼もしく、素晴らしいもの
に感じられます。最後に、後輩の
教員・学生、そしてこれからの九

州大学へエールをいただきたいと
思います。

秀村 宮本先生や竹内先生がよく
言われていた言葉は、「運・鈍・
根」でした。運は神の与え給うも
のですが、鈍というのは頭が切れ
すぎるよりは鈍重なくらいに、ゆ
っくり考え、根気強くあれという
ことでしょう。それと、健康です
ね。健康は学問の基礎。健康のた
めには十分時間を使っていと思
います。頭の悪いヤツこそしっか
り体を作ることですよ（笑）。す
ると、何にでも積極的に長続きが
します。今度、学士院賞をいただ
いて、よくわかりました。私より
ももつともっと優秀な人はたくさ
んいたし、素晴らしい業績をあげ
た人もたくさんいたのに多くの
方々が亡くなられた。私が賞を
いただいたのは長生き賞ですね。そ
う自覚して慢心することなく、学
問を楽しみ、「学びつつ老いてゆ
きたい」と思っています。

九大には、移転は革命的な歴史
の転機ですから、持ち味を生かし
ながら全く新しい大学を創造する
気迫で進んでほしいですね。

歴史とは古いものではなく、新しいものです。
歴史の中に必ず次の時代があるのですから。





林野庁長官

辻健治

つじ けんじ

二〇〇七年八月三日、九州大学農学研究院の招きにより、農学部のある教室で「今後の森林・林業行政について」というテーマで講演をしてくださった辻健治林野庁長官。林野庁長官就任は、同年一月のことです。「大学時代は今のようない立場などおよそ想像できない劣等生でした」と笑う御本人ですが、日本の森林・林業行政への情熱は、入庁当時から人後に落ちないものがあつたことは言うまでもありません。その情熱の源流を九大時代にまでさかのぼりながら、仕事への思い、日本の森林・林業再生へかける夢についてお話をいただきました。

このインタビューは、平成十九年七月十一日、箱崎キャンパス農学部事務長室で行われました。

聞き手

川崎 章恵

生物資源環境科学府
博士後期課程一年

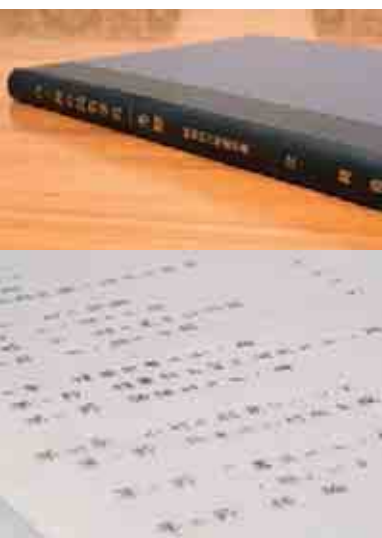
辻 健治氏
プロフィール

昭和四十七年三月九州大学農学部林学科卒業、同年四月林野庁入庁。その後、熊本宮林局（現九州森林管理局）総務部長、九州森林管理局長をはじめ要職を務め、本庁次長等を歴任し、平成十九年一月に林野庁長官に就任。

聞き手

川崎 章恵（かわさきあき恵）さん
プロフィール

平成十六年四月「九州大学二十一世紀プログラム一期生として入学。大学院生物資源環境科学府修士課程修了。現在は、大学院生物資源環境科学府博士後期課程一年。森林政策学研究室に所属し、林業労働問題に取り組む。「NPO法人環境創造舎」設立メンバーとして伊都キャンパスの里山保全活動等に取り組む。第十三回森林と市民を結ぶ全国の集い実行委員を務める。



「山ノ神」に魅せられ、 導かれて

— 今日は懐かしい物を持参しました。私も辻さんと同じ森林政策学研究室（旧林政学研究室）に籍を置いていたのですが、辻さんの卒業論文が残っていたのです。山や山村、そして山ノ神にまつわる民俗学的事例を追いかけたもので、林学としては大変ユニークなテーマですが、九州大学農学部を目指し、その後林学に進まれたのも「これが勉強したい」というはっきりした目的があったからですか。

辻 あえて言えば、農学部を受験したのは家が農家で、自分も何か役立ちたいと思いがあったからでしょう。ただ、期待を裏切るように申し訳ないのですが、大学時代は出来の悪い学生でした（笑）。学生紛争の最中だったこともあり、物理を半単位落として留年もしています。ただ、この時にたつぷり自由時間に恵まれたお陰で、柳田国男の「海南小記」という本に出会い、山ノ神に興味を持つように

なつたのです。

— 卒論の「まえがき」で、「勉強を進めていくうちに、山ノ神にまつわる民俗学的事例を明らかにしていく事は、山と山村住民との係りあいを明らかに出来るのではないか」と思いついてきた」という一文があります。この卒論は林野庁への就職活動ともつながっていく気がするのですが。

辻 いえ、最初は製紙会社に行くかと思っていました。当時三年生になると北海道の演習林に演習旅行に行くのですが、その時、製紙会社に行くと話を聞いたほか、林野庁で仕事内容を聞く機会があったのです。何だか林野庁の方が自然を相手する仕事だし、自分らしくいられそうな気がしたのが入庁の動機です。

— 予想通りの職場でしたか？

辻 卒論のフィールドとして宮崎県の諸塚、椎葉を選び、古老の話を聞いたり、土地の方々に親切していただいたり、頼まずともいろいろなところに案内していただくといった数々の出会いが非常に良

い思い出として残っています。私にはもともとそうしたフィールドワークや現場が好きなのでしょうね。歴代の林野庁長官の中でも地方回りをしている方だと思います。林野庁は大きく本庁、施設等機関、地方支分部局等の三つの部署に分かれています。その中の地方支分部局に当たる九州森林管理局の局長をしている時に、沖縄県西表島に森林環境保全センターを作ろうと検討していたのですが、自分が行かないと西表の森林環境が守れないという思いがあつて、いちいち出張していました。そうして局長時代に森林を守るためにはどういう組織を作ったらいかというデッサンまでは完成させることができました。その後、林野庁に戻って自分の思いを形として実現できたのは、この仕事のやりがいの一つですね。

山を見て、山を守る

思いを形にできる達成感

— 確かに自分の考えや発想を具現化できるというのは魅力ですね。



辻 現在の林野庁長官といった最高位ではなくとも、大きな仕事ではなくても、達成感のある仕事ができるのは林野庁に一貫している風土のような気がします。営林署長時代にも自身納得のいく仕事できたと思うことがあるのです。

— どのようなお仕事であつたのか具体的に聞かせ願えますか？

辻 まず予算があつて、どう使うかを決めていくのはどの組織でも同じだと思いますが、森林を育てるための選択枝は植付け、下草刈り、間伐などいくつかあります。営林署長時代、私は当時あまり一般的なではなかった間伐施業を重視

して事業を実施しました。今日に至る間まで間伐施業の有効性を認める流れは生きており、自分自身の目で山を見て、山のために良いと思って決断できた仕事だと自負しています。

― 近年、国民の森林に対する期待は高まる一方です。政策、経営両面で難しい時代であると思うのですが、今後、林野庁はどのような使命を帯びて、日本の森林や林業をどのような方向に持っていくとしていくのですか？

辻 日本は資源の乏しい国であることはご存知の通りで、木材も木材に頼りっきりの印象が強いと思います。ところが、実は今、数十年ぶりに国産材の復活の兆しがみえているのです。この機を捉えて私たちがやろうとしているのは、森林の整備、そして林業と木材産業の振興です。森林整備の方は例えば、地球温暖化防止のための森林吸収源対策ですが、政府全体の賛同もいただき、十九年度予算では新しく追加された事業費を使って間伐を二十万ヘクタール増やし

ます。間伐することで間伐材が出てくるので、それを製材工場や集成材工場の原料として使う。そういうシステムの構築と人材確保を推進しています。それが数十年ぶりに国産材復活の可能性が出てきた背景です。これをぜひともメドをつけたいという風に思っています。そこさえ完結できれば、私は長官をやれて良かったなと思います。いわゆる日本の林業、木材産業の復活です。

数十年ぶりに国産材が復活しようとしている

― 数十年ぶりのチャンスというのはもう少し具体的に言っと？

辻 ブラジル、ロシア、インド、中国の頭文字をとって経済界では「ブリックス」という言葉も生まれているように、これらの国々で生活水準や工業生産レベルが上がっていて、木材の需要量も急激に伸びています。中国だと日本の三倍ぐらい丸太を輸入しています。そうすると需給が非常にタイトになり、木材価格が上がってきます



よね。一方で日本の森林資源は第二次世界大戦後に植えた人工林がようやく利用期に入り、国産材を原材料とする製材工場や集成材工場などの新設があちこちで始まっています。山側の方は安定的に工場に原料を供給していくという流れと合流して、林業そのものの復興につながっていきます。さらに地球温暖化防止という観点で「国産材を使っています」ということをセールのポイントにする大手ハウスメーカーが出てきたことも注目すべき動きです。国産材が注目され、そのための設備投資も始まっている。そういう状況が数十年ぶりに出現しているということです。

― その一方で九州のある県では、大規模流通を下支えしている林業従業者の多くが、雇用労働者から請負化されて、就業条件の改善がままならないという事例もありま

す。このような就業者の存在について、どのようにお考えですか？

辻 私自身は就業者の問題はそれほど悲観的には考えていません。林業の担い手を育てる「緑の雇用」という取り組みがありますが、どういう人たちが応募しているかというと、皆、都市部の「山が好き」といった人たちなのです。むしろそういう人たちに対して雇用の場が提供できず、「仕事を作ってほしい」というのが今までの要望でした。逆に今度は人が足りないという状況も出現していますが、企業が採算性を確保して、事業を進めていくことができれば、高性能林業機械などの設備投資も進んでいきます。重労働からも解放されるということであれば結構若い人たちも集まってくるのではないのでしょうか。それには国内林業・木材産業の再生です。それと先ほど言いましたように森林整備を両輪として推進していくということです。先日、岩手県の住田町に行ってきたのですが、同町では木材加工施設で協同組合を起こし、

雇っている数が二百七十人。それに山側の人たちや運送などを入れるとおそらく四百人ぐらいの雇用が生まれているはず。町の人口は約六六〇〇人ですから、その中の四百人というのはかなりの比率でしょう。ですから、林業・木材産業をうまく活性化すれば、今

言われている中央と地方の格差是正を実現する手段になると私は考えているのです。

九州大学に

アジアの研究拠点を

― 森林の管理保全の重要性は多くの人に共通認識としてあると思

うのですが、加えて、林業の活性化を通じて地域起こしを図るのは大きな課題ですね。最後に九州大学へ、そして後輩たちへアドバイスやメッセージをいただきたいと思います。

辻 まず九州大学に対して希望を申し上げます。霞が関の林野庁からすると、アジアの例えば中国やインドといった国々で急激に木材需要が増えていますので、そのあたりの情報を知りたいわけです。北海道大学ではロシアを専門とした分野を確立しようとしているようですが、九州大学にアジアの木材需要を始め、ありとあらゆる情報収集や相談ができるアジアの研究拠点があつたら活用させていただけに思うのです。また、それが国立大学法人だからこそできる特徴ある大学作りの一手になるのではないかと考えます。九州大学だけではなく宮崎大学や鹿児島大学など他大学と組んでもいいのではないのでしょうか。

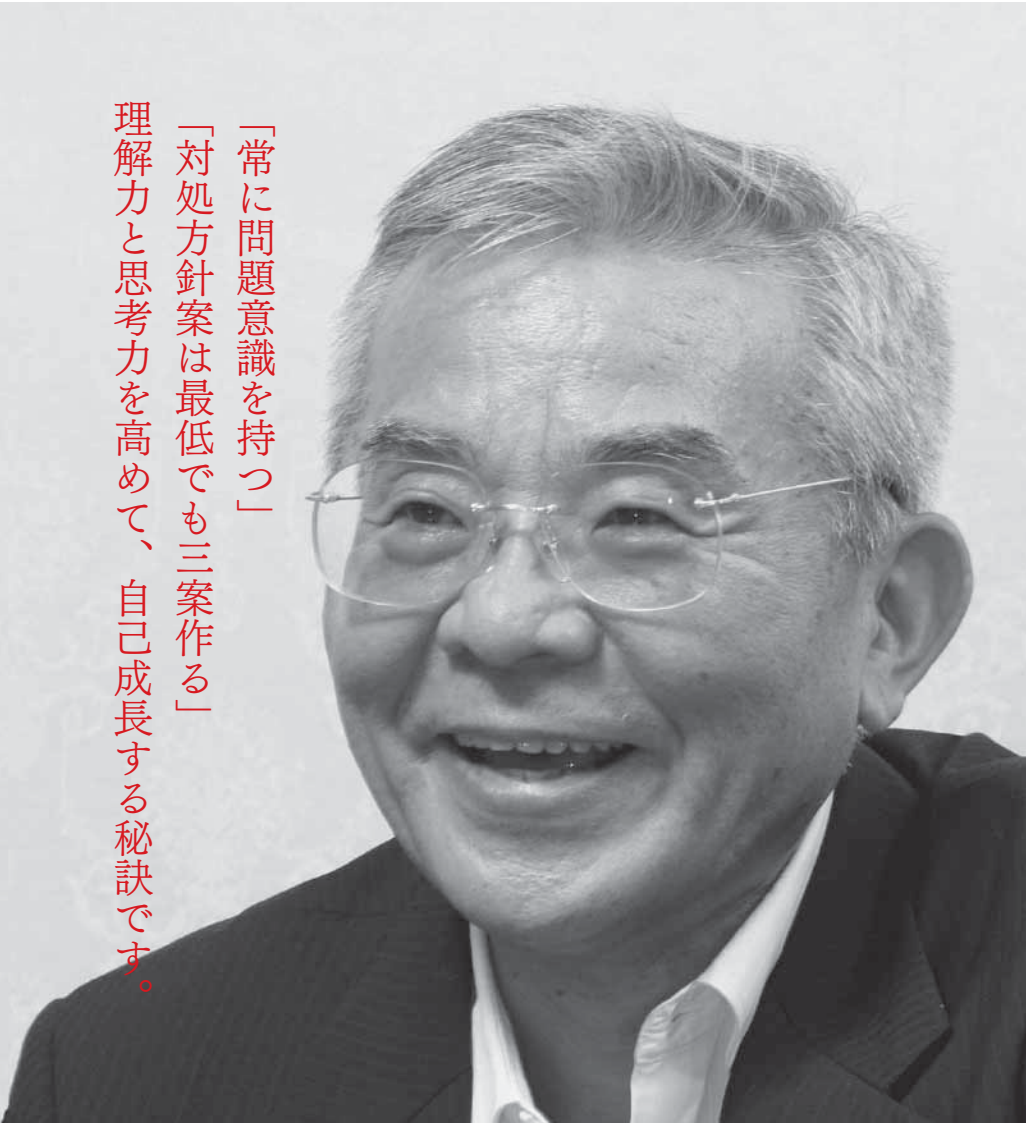
学生の皆さんに対しては、教養部時代の友人に会うと「なぜお前

が林野庁長官なんだ」と笑われるほど成績も悪く、大した学生時代ではなかったので心苦しいのですが、林野庁に入って自覚したのはなぜこうなるのか、なぜやれないのか、あるいはこういうことをやる必要があるのではないかと、常に問題意識を持つことの大切さです。問題意識を持つと、物事の必要性などが理解でき、理解力が付くと、人間は成長していくのです。もう一つは、これは入庁したての時、先輩にいわれた言葉ですが、ある事案が勃発して対処方針を作る時、「一つではダメ。最低三つ作れ」と言われて今に至るまで実践しています。これはどういう効果があるかというと、選択肢を考えることで自分の頭の中が整理されていくのです。そういったことが、私なりに成長していくということにつながっていったのだと思います。学生時代の成績などは全く関係ありませんから、皆さんもぜひ社会に出たら実行してほしいですね（笑）。

「常に問題意識を持つ」

「対処方針案は最低でも三案作る」

理解力と思考力を高めて、自己成長する秘訣です。



宇宙工学

FRONT
RUNNER

シリーズ研究

ふろんと
ランナー

「ふろんとランナー」は、九州大学の研究の最前線をインタビューで紹介するシリーズです。シリーズ第四回目は、人工衛星を開発するOSAT Project教員マネージャである工学研究院航空宇宙工学部門の花田俊也准教授と学生プロジェクトマネージャで工学府航空宇宙工学専攻の鶴田佳宏さんに、言語文化研究院の佐藤正則准教授が聞きます。

聞き手 言語文化研究院 佐藤正則 准教授

VOL
4

オーロラ帯磁化プラズマ観測衛星 Q SAT (Kyushu Satelight) の 打ち上げに挑む

全国的にも例のない
学生主導による五十kg級
小型人工衛星開発

佐藤 今日、小型人工衛星開発プ

ロジェクトという大変夢のある面白
そうなテーマに引かれてやってきま
した。何分にも門外漢ですので素人
にもわかるように優しく教えていた
だけだと思います。

花田 プロジェクト名をQ SATとい
います。平易にと言われたのに、
難しい話になるのかもしれないので
すが、人工衛星は宇宙にいる時に周
囲にあるプラズマ粒子によって帯電
し、電位が発生して、許容範囲を超
えると絶縁破壊が起きて壊れてしま
います。私たちが作っているのはな

ぜそういう現象が起こるのか、沿磁
力線電流と帯電の関係を説明する
というミッションを負った衛星で
す。具体的にはオーロラ帯に存在す
るといわれている沿磁力線電流の検
出、そして沿磁力線電流を通過する
時の帯電状況モニタリングを行いま
す。読んで字のごとく「オーロラ帯
磁化プラズマ観測衛星」ですね。

佐藤 北極や南極で見られるあの
オーロラが人工衛星にはよくない影
響を与えるのですか？それにしても
人工衛星の打ち上げなどというと、
私たちは国家レベルの事業じゃない
かと思ってしまうのですけれども、
最近は大学などでも参入していこう
という動きが起りつつあるのです

工学研究院准教授

花田 俊也

はなだ としや

工学府航空宇宙工学専攻

鶴田 佳宏

つるだ よしひろ

か。

花田 その流れは顕著です。QSATは九州大学だけでなく、九州工業大学、福岡工業大学が参画していますし、東京大学、東京工業大学はすでに打ち上げに成功した実績もあります。近々、日本大学と東工大がやはり打ち上げにチャレンジします。

鶴田 九大でもQTEXという超小型テザー衛星を開発していました。テザーとはひもので、同じ二つの衛星をひもで結ぶと、それぞれ重力、遠心力の違いで、ひもの方向が地球に向かうように安定するという特徴があり、それを実証する衛星です。九州経済連合会の枠組みの中に

九州航空宇宙開発推進協議会があり、さらにその中に九大のQTEX研究会が二〇〇三年に立ち上がり、九州の企業の方と一緒に衛星を作っていきますしようということで始まりまし

た。QTEXはQSATの前身です。

花田 あくまで学生主導のプロジェクトであることもQSATプロジェクトの大きな特徴です。昨年、JAXA（宇宙航空研究開発機構）が二酸化炭素の観測を行うため二〇〇八年に打ち上げるGOSAT（温室効果ガス観測技術衛星）に相乗りする小型衛星の公募を行ったのですが、彼らがぜひトライしたいということでQSATも名乗りを挙げました。二十一団体が応募し、候補リストに残ったのがQSATも含めて十九団体。今年の五月に最終選考があったのですが、残念ながら今回は選考に漏れました。

佐藤 それは残念です。しかし、QSATは三つの大学の共同研究ということに加えて、九州の企業もバックについているわけですからかなり大きな組織だと思うのですが、その

組織運営を学生主導でやっているというのは、頼もしいですね。

花田 一つ強調したいのは現在、学生主導で動いている衛星プロジェクトは、ほとんど十立方cmの箱に収まるくらいの衛星なのに対して、QSATは約五十立方cm、約五十kgクラスの衛星を開発していること。学生主導でこの規模をやっている点は特筆していいと思います。

佐藤 学生が主導すると、どんなメリットがあるのでしょうか。

花田 面白がつてやってくれるのがいいですね。相対的にはコストが押さえられますので、ハイリスクなことでも試せます。国家プロジェクトだと何億円とかけて、最善を尽くして信頼性の高い部品を選んでも失敗することがありますし、大きな損害を残すという懸念がいつも付きまっています。学生主導の場合は失敗を前にやらせたら、できてしまうという逆のパターンですから（笑）。

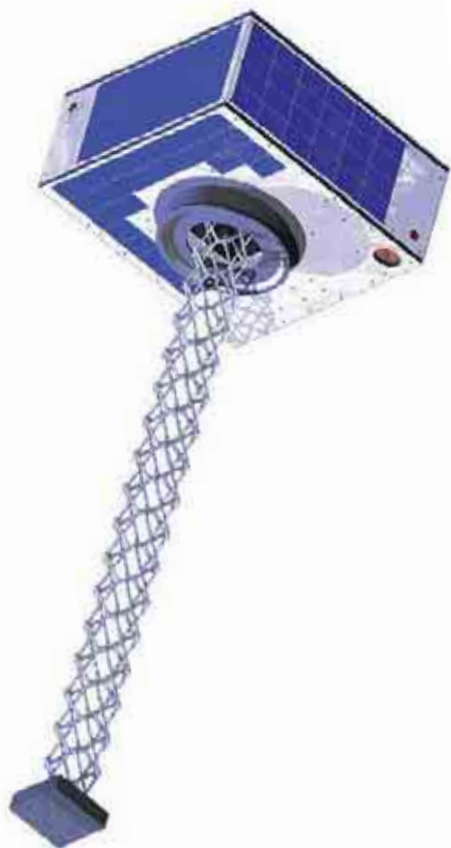
佐藤 かなり思いきった新しいことにも取り組めるということですね。
鶴田 アメリカのスペースシャトルなどは七十年代のテクノロジーでできているという話もあるのですが、大げさでなく、サイズの面だとか消費電力の面だとかで私たちの方がか

なりの効率化を実現していると自負しています。

**“ものづくり愛”
宇宙のように果てしない**

佐藤 鶴田さんは学生プロジェクトマネージャとなっていますが、QSATの組織の中ではどういうポジションになるのですか。

鶴田 衛星開発にはバスシステムといって、衛星としての基本性能を提供するシステムが必要で、QSATでは構造、熱制御、電源、通信、データ処理、姿勢制御といった六つの系（システム）からなっています。九州大学ではそれぞれの系に学生が一人か二人付いているほか、各システムごとにバックアップしてくれている教授がいます。また、GOSATの相乗りに応募する時に花田先生が十八社の技術企業を回って技術支援を取り付けてくれ、わからないところやその企業の得意分野を親身に教えてもらえる環境です。しかし、学生組織というのは企業のように系統立っていないし、授業や試験など学業をやりつつの開発になるのでいろいろ制約が大きく、また、企業であれば、一人の社員の技術は十年間くらいは維持できますが、学生の関わる期間は長くて三年、短くて一



QSATイメージ図

年。年次が上がったりして現場にいなくなってしまう。そのため、技術継承や研究室としての技術の蓄積は大きな課題です。そうした制約下でのプロジェクトマネジメントを研究するのが、私の役どころです。実際、これは自分の研究テーマにもしています。

佐藤 自分が学ぶ場でもあり、後輩に教える場でもあるということですね。学部生もいれば、大学院生もいる。バックには先生も一般企業の方もいる。多くの人間が集まって一つのもの宇宙へ持っていくという共通目的に取り組むわけですが、大人数で一つの目的に向かっていく時に心がけていることは何ですか。

鶴田 このプロジェクトには欧州の宇宙機関で実際にロケットを飛ばしていた方などいろいろな前線で活躍されてきた先生が関わっていらっしゃいます。そういった方から直接指導を受ける機会も多いのですが、その中で熱制御系の八坂哲雄先生からある時、「いろいろな人が関わって、プロジェクト全体として動かす時はコミュニケーションが大事」というアドバイスを受けました。特に衛星開発はほかの系との関係がかな



聞き手：佐藤准教授

り強く、完全分業式で自分の担当だけやって、後でドッキングさせるという方法ではうまくいかないのです。しかし、会社でいえば六つの課があり、一つの課に一人か二人しかいないのですから、自分の系に関してはすごく詳しくなるが、ほかのことは分からないということが多いですね。それだけに他の系ではどんな事をやっているのか、どういう要求があるのか、なぜそういう要求があるのかといったことを話し合って、コミュニケーションを取ることが不可欠。それを調整していくのがマネージャの第一の仕事だと考えています。

佐藤 苦心することも多そうですね。やりがいも大きそうですね。
鶴田 衛星開発は多岐にわたる専門知識が必要。現実的には機械系の学生が中心にやっているのですが、みんな電気や電子、あるいはプログラミングなどは授業であまり習っていないから、自分で調べてやっている状況です。ただ、普通の研究だと

コンピュータ上のシミュレーションで終わったりするのに対して、QSATプロジェクトでは自分たちの提案がそのまま形になる。実際に試験をして動かなかったら、どうしてだろうと検証できる。どちらかというと現実社会から離れたフィールドではあるのですが、やっていることはものづくりそのものというか、ものすごくプラクティスな作業です。モノは正直で、動かないものは動かないし、ごまかしがきかない。それだけに自分の作ったプログラムや試験した結果がうまくいくととてもうれしいです。また、企業の方と週一回ミーティングをしており、モノに触れながら実験を通して学べる点も学生にとっては大きな収穫になっています。

宇宙を舞台に

ベンチャービジネスを立ち上げたい

佐藤 GOSATには相乗りできないということですが、プロジェクトはこれからどうなっていくのでしょうか。

花田 衛星打ち上げを希望している大学はかなり多く、サポートしてくれるコンソーシアムも生まれています。宇宙工学の教育目的に作られた

団体でUNISEC（大学宇宙工学コンソーシアム）といい、そこがロシアのロケットを使って打ち上げることを考えてくれているようなのです。それには希望したいのですが、有償です。一朝一夕にはいかないと思うのですが。

佐藤 実は私はロシア語の教師で、今のお話を聞いて、もつとロシアに興味を持つ学生が増えないかななんていう淡い期待を抱いたりしましたけども（笑）。仮にQTEXやQSATの打ち上げに成功したとしてこれを足がかりにすると次にどのような展開があるのですか。

花田 QTEXのテザーはただのひもですが、ひもを導線に換えて電流を流すと地球の磁場と干渉して電磁力が働きます。それが抗力となって、古くなった衛星を早く落とすことができます。つまりスペースデブリという宇宙ゴミ問題に貢献できるということが一つあります。また、QSATの発展系としては宇宙天気予報ですね。宇宙には放射線など高エネルギー粒子が沢山あって、衛星に障害を与えていきます。宇宙天気予報で障害の要因を取り除こうという研究も進められています。また、QTEXやQSATの打上げを通して、衛

星としての基本システムが確立できればいろいろなお客様（アイデア）が考えられます。特にビジネスアイデアがあつたらそれを具体化していきたいですね。

佐藤 宇宙はビジネスになるということですか。

花田 一つの話題としては、アマチュア無線から発展した無線技術を搭載することで宇宙インフラを構築できる可能性があります。ご存知のとおり、携帯電話は大きな衛星で中継していますが、小型の衛星をいっぱい打ち上げた方が格段に低コストになります。宇宙は特別な人の観測や実験の庭ではなく、インフラを始めビジネスの場として捉えられ始めていることは事実です。宇宙を全く知らない文系のアイデアもこれからどんどん求められてくると思いますよ。

佐藤 何だか宇宙がぐんと身近に感じられてきました。では、鶴田さんは自分の将来を含めて、QSATプロジェクトにどんなビジョンを描いていますか。

鶴田 日本ではまだ学生の衛星プロジェクトの認知度そのものが低いのですが、イギリスのサリー大学では、学生が私たちと同じような五十kg級（だいたい五十立方cm）の衛星を始

めて、世界シェアを獲得するまでになっています。学生プロジェクトが転じてベンチャービジネスとして開花しているのですね。日本の大学からも衛星ベンチャービジネスが誕生してもおかしくないと思っています



鶴田さん



花田准教授

す。QSATはプロジェクトなのでいつか終わりがきますが、サリー大学のようにベンチャービジネスとしてずっと存続していつてくれたら。そういうビジョンを描きつつ頑張っています。それと、九州産の人工衛星というのは実はこれまで一つも上がっていないくて、QSATをぜひとも九州第一号にしたいですね。

佐藤 高校生たちも自分の夢を一生懸命探していると思うのですが、彼らにメッセージをいただけますか。

鶴田 私の高校生の時、どこか大学に行くかではなく、大学生活で何をしたいのかということをするべく考えました。それで、どうしてもこの航空宇宙工学の研究室へ来てたくて九大へ入ったのです。一つでもやりたいことがあると、それが目標になって最初の一步を踏み出させてくれるはず。また、大学は象牙の塔などと言われますが、現実社会と表裏一体となった研究もたくさん行われています。入学したばかりの一年生、二年生の方もいろいろな情報にアクセスしながら、アクティブに動いてほしいと思いますね。

花田 とにかく私が強調したいのはQSATにしても教員ではなく、学生が主体的、自律的に取り組んでい

るということ。お世辞ではなく彼らはすごい。何事かを成し遂げてくれると期待しています。

花田 俊也准教授 プロフィール

平成六年三月九州大学大学院工学研究科博士後期課程応用力学専攻修了。同年四月九州大学助手採用。平成九年四月助教教授。平成十四年四月宇宙環境研究センター併任。現在准教授。専門は宇宙工学。

鶴田 佳宏さん プロフィール

平成十八年三月九州大学大学院工学府航空宇宙工学専攻修士課程修了。同四月博士後期課程進学。現在、宇宙機ダイナミクス研究室在籍。QSATプロジェクト学生マネージャー。



宇宙機ダイナミクス研究室

キャリア支援センター の取り組みと 博士人材の キャリアについて

九州大学キャリア支援センターは、産業界を含む多様な場における博士人材（博士学位取得者及び博士学位取得を目指す方々）の活躍を支援するため、昨年七月に発足しました。現在、カウンセリングから各種講座の開設まで、博士人材の就職・進学について、文系・理系を問わず様々な支援を行っています。

今回は、大学、民間企業に就職した博士人材、その就職先である企業というそれぞれの立場から、博士課程修了者のキャリアと就職の問題について語っていただきました。

九州大学キャリア支援センター

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 旧工学部本館243号室
Tel.092-642-7538 Fax.092-642-7539
E-mail: info@qcap.kyushu-u.ac.jp
URL: <http://www.qcap.kyushu-u.ac.jp>

井上 今日の産業構造の変化により、博士人材がこれまでは考えられなかったようなフィールドで活躍するようになってきていますが、山田センター長はどのようにお考えでしょうか。

山田 博士号取得者が、リーダーシップ能力を持った高度技能者として、民間企業も含めて活躍の場を広げていくことを期待しています。そのためには学際的な知識、幅広い視野からものを考える力と、実務的な能力が必要です。

井上 企業側からの、博士人材への評価はいかがでしょうか。

金山 弊社が博士人材に期待する能力は、理解力、企画力、課題を発見する力、ソリューションの力などです。弊社は記録情報管理という聞きなれない業務を行っていますが、電子化を中心とするワークスタイルの変化により、近年、日本社会においても、「組織としてどのように情報をマネジメントするか」ということが、大きな問題となっています。記録情報に対する新しい処理方法、ルール作りが必要となっているわけですが、そこで博士人材の専門性が

非常に活けると考えています。また、日本では広く浅く、深く狭くという言葉をしてきましたが、私どもの業界では今、まさに「広く深く」ということになってきているんですね。そうした奥行き・広さ・深さを備えた人材を育てていかなければなりません。

出口 弊社の場合は、いわゆる知的財産を扱う会社ですが、今日では知的財産というものが、企業の研究開発から事業、経営にまで、関与する領域が広がってきています。また、グローバルな展開が必要になってきて、語学にしても特許の制度にしても、いろんな国のものを知らなければ仕事ができなくなっています。そういう意味で、非常に専門性が高くなっていますね。

井上 お二人は学生時代、民間企業への就職をどのように考えていましたか。

勝野 博士課程に進んだ段階で、民間企業に就職する選択肢は諦めていました。ただ、柳川市にある古文書館での仕事などを通じて、たとえば一〇〇%ではなくとも、自分の研究や技術を生かした仕事に就きたいと



司会
井上剛実 いのうえ たかみ
九州大学キャリア支援センター
コーディネーター



山田耕路 やまだ こうじ
九州大学教育担当理事・副学長
九州大学キャリア支援センター長



金山克己 かねやま かつみ
日本レコードマネジメント株式会社
(キャリア支援センター連携協力機関)
代表取締役副社長



勝野寛美 かつの ひろみ
日本レコードマネジメント株式会社
RMT事業部
九州大学大学院 人文科学府出身



福地成彦 ふくち なるひと
株式会社レイテック
調査5G
九州大学大学院 システム生命科学府出身



出口隆信 でぐち たかのぶ
株式会社レイテック
代表取締役社長

いう考えは持っていました。そしてキャリア支援センターを通じて、日本レコードマネジメントという会社を知ったことが、就職のきっかけとなりました。

福地 博士課程に行った時点で、やはり研究職ということではいたんですが、民間企業も色々受けました。ただ、やはり企業の欲しい人材と自分のスキルや希望とのマッチングが上手くいかず、なかなか決まりませんでした。そうした時にレイテックをキャリア支援センターの方から紹介していただいて、こういう専門性の活かし方もあるんだ、と。

山田 学問の世界と実業の世界は本質的には、そんなに変わりません。結局、オリジナリティのある活動と、というのは、学位を取得するのも、社会で問題を解決するのも、全く同じ考え方なんです。使う技法が異なっているだけなんです。

井上 一方で、自分の研究分野から外れることに、かなり不安を持っている方もいます。

勝野 なかなか民間への就職希望を言い出せないような雰囲気はあると思います。

出口 それだけ執着してきたことをリセットして、ちょっと違った分野に出て行くというのは、非常に抵抗があるだろうなと思います。ただ、やはり世の中の仕事というのは、ニーズに応じて成り立っているの、自分のシーズが必ずしも世の中のニーズと一致するわけではないんですよ。そこさえ上手く対応できれば。

勝野 一〇〇%研究を活かせなくても、リンクする部分を取っ掛かりにして進んでいく技術は、誰しも大学院で身につけていると思います。

福地 もちろん、研究職を続けていきたいというのはあると思いますが、視野を広げて、いろんな視点で就職ということを考えてもらえれば、と思いますね。

井上 最後に、センター長から一言お願いいたします。

山田 一芸に通じることは多芸に通じます。現在の、いわゆる専門家として育っていく過程で成功体験を持って、自信をつけて、どんな社会にでも出て行けるよう、自分自身を磨き上げてほしいですね。

九州大学百年記念事業推進会 東京部会を設立

平成十九年七月二十七日（金）、都内で「九州大学百年記念事業推進会東京部会」の設立総会と記念パーティーが開催されました。

九州大学は、明治四十四（一九一）年に、二〇世紀の日本を担う拠点大学として九州帝国大学が設立されて以来、平成二十三（二〇一一）年をもって百周年を迎え、現在記念事業の実施に向けて準備を進めているところです。

東京部会は、百周年記念事業の実施に向け、法人（企業・団体等）への募金事業や記念事業に関する助言等を行う学外支援組織として、広く産業界、有識者の方々と設立された記念事業推進会の関東地区の役員や顧問で構成され、部会長には前田勝之助東レ（株）名誉会長が就任しました。

当日は、関係者約百名が出席して総会が開催され、その後会場を移して記念パーティーが開催されました。

今後、関西部会の設立も予定されています。

百周年記念事業

- 教育研究環境の整備充実を図るための九州大学基金（仮称）の創設
- 生涯学習時代に対応する社会人等の受け入れ推進事業
- 産学連携・地域連携等推進事業
- 国際交流推進事業
- 九州大学百年史の編纂と記念式典・記念シンポジウム等の開催



（写真上）
会長に就任した前田 勝之助 東レ（株）名誉会長
（写真中） 総会の出席者の皆様
（写真下） 総会の後に行われた記念パーティー

表 敬 訪 問

welcome to Kyushu University

駐日本大韓民国大使館 特命全権大使

平成十九年六月十五日（金）、柳明恒駐日本大韓民国大使館特命全権大使が、梶山総長を表敬訪問しました。

柳大使は、大使就任後初めての来福の折、本学を訪れたもので、梶山総長から水素エネルギーに関するプロジェクト等、九州大学の研究活動の現状などについて説明があった後、九州大学における韓国語の履修状況、韓国の大学との大学間交流及び今後の交流促進に関して、和やかに意見交換を行いました。

また、表敬訪問後は韓国研究センターを視察し、稲葉韓国研究センター長がセンターの現状等について説明を行いました。





Kyushu University OPEN CAMPUS

盛況だった オープンキャンパス

平成十九年八月七日(火)と八日(水)の二日間にわたる本年度九州大学オープンキャンパスが盛況のうちに終了しました。大型バスが次々に到着し、キャンパスは全国から集まった一万人以上の高校生たちで溢れました。

期日と対象学部等

■ 八月七日(火)

文学部、教育学部、法学部、経済学部、21世紀プログラム

■ 八月八日(水)

理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、芸術工学部、農学部、21世紀プログラム



新理事・ 事務局長紹介



松元 昭 憲

まつもと あきのり

平成十九年七月一日付で、松元昭憲(まつもと・あきのり)新理事(総務担当)・事務局長が就任しました。松元理事は、広報専門委員会の副委員長でもあります。

就任三ヶ月を経ての感想は「初めての大学勤務は新鮮。鹿児島出身で親近感もあってつい郷土訛が出てしまいます。百周年を目前にして、世界の知の拠点を目指して改革や新キャンパス移転を進める九州大学のお役にたい」とのことです。

「松元理事略歴」

昭和五十一年東京大学法学部卒。文部科学省初等中等教育局教職員課長、文化庁芸術文化課長、スポーツ・青少年局企画・体育課長、(独)国立西洋美術館副館長、文部科学省生涯学習政策局生涯学習総括官、(独)国立青少年教育振興機構理事などを経て現職。

福元 言語文化研究院准教授に

「日本独文学会賞」



日本独文学会賞授賞式（東大駒場キャンパス）

平成十九年六月九日（土）、言語文化研究院の福元圭太准教授が、第四回「日本独文学会賞」（日本語著書部門）を受賞しました。氏の著書『青年の国』ドイツとトーマス・マンー20世紀初頭のドイツにおける男性同盟と同性愛ー』（九州大学出版会二〇〇五年）に与えられたものです。この賞によつて同書は、二〇〇五年に刊行された独語・独文学関係の日本語による著作の中で、最も優れたものと、日本独文学会により認められました。

福元准教授は、ドイツでも忘却されている「ドイツ青年運動」の思想家ハンス・ブリューナーが、作家トーマス・マンの一九二〇年代における思想、特に「ドイツ共和国」の構想に多大な影響を与えたことを詳らかにし、その点が特に高く評価されました。

ユーザーサイエンス機構（USI）と

熊本県が連携協力協定を締結

USIと熊本県は、これまでシンポジウムやワークショップの開催などを通じて連携を深めてきましたが、今後の連携を組織的にもより強いものとするため、平成十九年七月三十一日（火）に協力協定を締結しました。熊本県がユニバーサルデザイン（UD）に関して大学の研究機関と協定を締結するのは初めてです。

今回の締結で、USIは熊本県というUDに積極的に取組む地域でUD評価手法の実践、検証を行うことができます。熊本県はUSIが培った製品の評価基準やユーザーの感性

を把握する手法を活用して、学術的裏付けを持った様々な取組みを進めることができます。このように単独では尽くせない部分を補いあい、それぞれの特長を活かすことでユニバーサルな社会の実現を目指す取組みが可能となります。

平成十九年十一月には熊本県で実施される「くまもとUD大賞」に連携して、独自の審査基準作成を行うなど、今後UD研究連携や人材・情報交流を進めていきます。



連携協力協定書を交わして
左）熊本県総合政策局長 木本俊一
右）九大芸術工学研究院准教授
・USIユーザーインターフェース部門長 平井康之



共同記者会見の様子
左）熊本県総合政策局企画課特定政策推進室長 山内信吾
右）九大芸術工学研究院准教授
・USIユーザーインターフェース部門長 平井康之

シユタインバイス大学との 合同プログラム

平成十九年七月三十日（月）から八月二日（木）にかけて、「シユタインバイス大学と九州大学の合同プログラム」を九州大学箱崎地区で開催しました。

九州大学側の合同プログラムの開催目的は、ドイツのシユタインバイス大学の学生との交流を通じて、ポスドク自身のキャリア設計及び自己啓発の機会を得ることでした。

プログラムには九州大学のポスドクターおよび博士課程学生十二名とシユタインバイス大学の大学院生七十一名、合計八十三名が参加し、経営・技術に関する講義を受講しました。

講義の受講後、シユタインバイス大学側の参加者と九州大学側の参

加者によって構成される八チームは、三日間にわたって日本市場向けのビジネスプランを考えるケーススタディーに取り組み、最終日である八月二日には、各チームがそれぞれのビジネスプランについてプレゼンテーションを行いました。

今回の合同プログラムを通じて九州大学の参加者は、広い視野に立脚した柔軟な思考、議論の手法・効率性などの点でドイツの学生から刺激を受け、今回のプログラムは、参加者にとって国際的な視野に立つて自らのキャリア設計を考える好機になったようです。



北京航空航天大学「大学生芸術団」が 九大フィルと交流公演

平成十九年八月二十一日（火）北京航空航天大学「大学生芸術団」（学生十八名、教員十二名）が九州大学を訪問し、九大フィルハーモニーオーケストラと交流公演を開催しました。中国国内の芸術公演大会で数々の受賞歴を持つ北京航空航天大学「大学生芸術団」は、二胡や揚琴などの民族楽器や民族舞踏などを披露し、九大フィルは、木管や弦楽などのアンサンブルステージを行いました。

公演後の歓迎パーティーでは、両大学の参加者が笑顔で交流しましたが、音楽や北京オリンピックの話などで会話も弾み、学生同士がアドレスを交換し合うなど、イベントの成功を物語りました。

※九州大学と北京航空航天大学は、平成十七年に大学間学術交流協定を締結しています。



同窓会の話題

九州大学東京同窓会 平成十九年ビアパーティ

平成十九年七月二十六日（木）、学生会館最大のホールで開催された「東京同窓会平成十九年ビアパーティ」は、九州大学マンドリンクラブOBによる「松原に」「千の風になって」等の演奏で始まりました。近藤秋男全日本空輸（株）最高顧問（東京同窓会会長）、梶山千里総長のスピーチ、古川治次うちよ銀行会長（東京同窓会参与）の発声による乾杯に続き、柴田洋三郎理事・副学長より大学からの来賓十名余の紹介と百周年記念事業推進会設立報告と同事業への協力要請がありました。

会場は出席者三百余名で埋め尽くされ、懇談・交流で盛り上がりました。福岡道生健保組合連合会会長（元日経連専務・東京同窓会参与）の閉会の辞により、名残を惜しみながら夏の宴を閉じました。

九州大学東京同窓会理事長 田坂和義

九州大学東京同窓会ビアパーティ



昭和四十四年九州大学法学部・経済学部卒 合同還暦祝同窓会

昭和四十四年に法学部及び経済学部を卒業した福岡在住の同級生が五年前から定期的に集まる会（「九大獅子の会」（獅子ⅡS44卒）と命名）を作り、現在毎月一回、第四木曜日に集まっています。

今年の三月末に全員が、還暦を迎えたことから、平成十九年五月十九・二十日に、熊本県の玉名温泉で両学部合同の還暦祝同窓会を開催しました。当日は両学部合わせて三十二名が参加し、温泉につかり、旧友との再会を喜びながら盛大な同窓会となりました。

後輩たちも、このような会を引き継いでくれることを期待しています。

世話人代表

昭和四十四年法学部卒

高石恭輔



ホームカミング in 六本松

第2回九州大学ホームカミングディ

第2回九州大学ホームカミングディの日程が平成19年11月23日（金）と決定いたしました。ホームカミングディは、卒業生の皆様に年に一度大学のキャンパスへ足を運んでいただくという九州大学の企画です。

移転を控えております六本松地区に、本学の卒業生の皆様をお迎えしたいと考えています。

また当日は、学園祭の開催期間中です。この機会に、懐かしい旧友やご家族とのひと時を九州大学で過ごされてみてはいかがでしょうか。



開催日 平成19年11月23日（金） 勤労感謝の日

場 所 六本松キャンパス（福岡市中央区六本松 4-2-1）

※第1回ホームカミングディの様様をホームページに掲載しています。

<http://www.kyushu-u.ac.jp/> 【検索枠に“ホームカミング”と入力してください】

昨年度実施事業

記念式典

なつかしの学食メニュー（昼食）&演奏会

新キャンパスツアー in 伊都

九州大学のあゆみ写真展 等

（今年度の実施事業は、順次ホームページ等でお知らせする予定です。）

【問合せ先】 九州大学総務部総務課 九州大学同窓会連合会担当
TEL : 092-642-4328 FAX : 092-642-2113
E-mail : alum.uok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

新聞で報道された九州大学

平成十九年六月上旬〜七月下旬

6月

大学、文学のバトロソ？

作家の後押し 高樹のぶ子特任教授
(朝日 6/1)

雲仙普賢岳 噴火十六年
ミヤマキリシマ咲く 松島健地震火山
観測研究センター准教授
(朝日 6/1)

フアントム九大墜落 来年四十年
足跡次世代に 資料提供を
(朝日 読売 6/13)

九大病院 脾臓移植終了
国内五十五例目
(西日本 6/1)

「はしかではない」 九大が広報を訂正
(毎日 6/1)

雲仙火山 マグマだまり四力所
地震火山観測研究センターが確認
噴火予測へ前進
(西日本 6/1)

日韓次世代ネット技術研究
四年間の継続決定
(日刊工業 6/1)

九州大学 NHKと連携し授業
(日刊工業 6/1)

UCLAと九州大学が大学間交流協
定締結
(西日本 日刊工業 南日本 朝日 毎日 6/1、
15)

福岡城 城門復元 割れる解釈
服部英雄教授(日本中世史)
(朝日 6/1)

医を診る 栄養管理 小児専門チー
ム制必要 増本幸二九大病院講師
(朝日 6/2)

伊都キャンパス設置
粒子加速器の安全性 住民に説明会
(西日本 6/2)

プロの劇場支配人育てます
芸術工学研究院 新コース設置
(朝日 6/3)

現役学生とOBが交流
屋台が並ぶ九大同窓会 農学部
(西日本 6/3)

足跡たどって安心通学 反射シール
森田昌嗣芸術工学研究院教授
(西日本 6/4)

産地と食卓考える 食育講座
甲斐諭教授(食料流通学)
(読売 6/4)

小児がん 遺伝子で悪性度判定
田尻達郎医学研究院准教授ら
(日経 6/4)

女性研究者支援の輪広がる
九州大学など
(日経 6/4)

清新な光景を求めて
花田俊典の仕事 上・中・下
(西日本 6/456)

市民公開講座 正山征洋名誉教授
原田実根名誉教授
(読売 6/5、10)

都城市教育委員会の山下さん
比較社会文化学府 博士号取得
(読売 6/6)

九大 女性研究者増を環境整備で支
援
(西日本 6/6)

SIAプロジェクト、ブログ開始
高樹のぶ子特任教授 メッセージ配信
(西日本 6/6)

『新海上の道』を語るシンポジウム
六本松キャンパスで
谷川健一民俗学者招いて
(読売 朝日 熊本日日 毎日 6/6、8、9、
10)

糸島新聞創刊九十周年記念
九大と共に創る糸島
(糸島 6/7)

九州大学久住高原牧場サマーキャン
プ
(熊本日日 6/7)

九大にハラルフード
イスラムの味流行る ナビさん
(朝日 6/7)

日本最大のムカシサンゴ
推定年齢 三〇〇年
野島哲天草臨海実験所准教授
(毎日 6/7)

大分県臼杵市のみそしょうゆメーカー
九大の味覚センサーで味の数値化へ
(毎日 6/8)

味覚を数値化
安定した客観評価実現 味覚センサー
都甲潔システム情報科学研究教授
(科学 6/8)

日本最大のサンゴ礁 しつぺ返し
野島哲天草実験所准教授
(毎日 6/9)

大分中部震源 過去に大地震
要注意 清水洋地震火山観測研究セ
ンター長
(西日本 6/9)

ゲーム開発の現場知って 福岡ゲー
ム産業振興機構 九州大学や市など
(読売 6/9)

「メタボの人 歯周病に注意
歯学研究 久山町研究で
(西日本 6/10)

薬学巡る現状解説
正山征洋名誉教授 市民公開講座で
(読売 6/10)

現代の「除福」 佐賀市に
元九大助教授の野中源一郎さん
(西日本 6/11)

福岡市 都市景観賞
芸術工学研究院教授ら審査
(毎日 6/12)

科学実験教室 参加者募集
システム情報科学研究教授
(読売 6/12)

ロシア研究者ら談話会
六本松キャンパスで
(西日本 6/12)

NHKアナウンサーなど
九州大学で講義
(南日本 6/12)

九州大吟醸 近大マゲロ 大学ブラ
ンドグッズシンポ 九大で開催
(読売 6/13)

「新・海の中道」公開シンポジウム
六本松キャンパス
(西日本 毎日 6/13、23)

サンゴ 高い海水温 漁業に打撃
野島哲天草臨海実験所准教授
(読売 6/13)

超新星 二段階爆発を初観測
山岡均理学研究院助教 板垣公一さ
ん
(朝日 毎日 西日本 読売 山形 夕刊アイリ
6/14、15)

九大フィルハーモニーオーケストラ
定期演奏会
(毎日 朝日 西日本 6/14、20、26)

九州大学とカリフォルニア大ロサン
ゼルス校(UCLA)交流協定締結
(毎日 6/15)

アフガニスタン 女性を取り巻く環境
厳しい現実 アジア総合政策センター
朝日 6/15

九大が地元に与える経済効果
年間二四七九億円 九大が試算
(西日本 南日本 富山日日 6/16、23)

出産後、不眠や食欲不振に 周囲の
支援求めて 吉田敬子九大病院講師
(読売 6/17)

独で子どもの検診・指導 九大歯科
医ら奉仕活動 久保敬司准教授
(朝日 6/18)

近代文化遺産を歩く 旧法文学部
用途変遷 呼び名も様々
(朝日 6/19)

生活習慣病とすい臓病 医療ルネッサ
ンス・セミナーを前に 九大病院
(読売 6/19、20、21、22、26)

しょうゆなどの味覚評価を表示
九州大学開発
(天分 6/20)

九州ディベートセミナー
六本松キャンパスで開催
(毎日 6/21)

「子どもの本の森へ、ようこそ」開催
ユーザーサイエンス機構
(朝日 6/22)

人骨は語りかける
土居ケ浜遺跡半世紀 中橋孝博教授
(西日本 6/22)

九大病院・医療センター
最新鋭ドック利用低迷
(読売 6/23)

医を見る 医学教育
知識詰め込みには限界
吉田素文医学研究院教授
(朝日 6/23)

「知っておきたいB型肝炎の話
林純医学研究院教授
(西日本 6/23)

子牛の時に太らせ後は草で成長
耕作放棄地の有効活用 高原農業実
験場
(読売 6/23)

風景デザインワークショップ
九大西新プラザで
(西日本 6/23)

九大退職教授による市民公開講座が
終了
(読売 6/24)

文部科学大臣賞
産学官連携功労者表彰 安浦寛人シ
ステムLSI研究センター長
(西日本 6/24)

時評 小説
松本文世「異邦人」 池田英之「雪の女
体」 松本常彦比較社会文化研究院教
授
(読売 6/25)

交付金改革 研究と教育分けて論議
を 梶山千里総長
(朝日 6/25)

教員採用試験漏えい問題
閉鎖的体質の改善を
(西日本 6/27)

公開講座「現代数学入門」
理学部本館で
(毎日 6/27)

中野三敏名誉教授 「江戸狂者傳」
朝日 6/28

博多部で「語ろう隊」 徹底討論
感じる「心都」目指せ 坂口光一教授
(西日本 6/28)

アート通し科学楽しもう
大橋キャンパス 学生の作品展示
「九州好青年科学館」
(西日本 6/29)

「田んぼ力検定」
九大研究者ら八月に実施
(朝日 6/29)

「身体とメディアの融合a」
ユニット「北中」大橋キャンパスで発
表
(朝日 6/29)

カミネ研究に展望は開けるのか
個人任せではない体制を
古江増隆医学研究院教授
(西日本 6/29)

7月

九大生の交流会
学生アパート「セトル伊都」
(西日本 6/29)

九大教授の無断翻訳疑惑
大学側調査「盗作、否定できない」
(西日本、毎日、日経、熊本日日、読売、山口、長崎、佐賀、南日本 6/30)

医を見る 詰め込み反省臨床重視
医学教育 吉田素文医学研究院教授
(朝日 6/30)

創薬 大学から起業続々 九州大学
(西日本 7/1)

田んぼ 幅広く再評価を「田んぼ力
検定」佐藤剛志農学研究院助教
(朝日 7/1)

九州と南西諸島の交わり語る
民俗学者の谷川健一さん 九州大で
(熊本日日 7/1)

九大芸工教授会 英書無断翻訳
否定しがたし
(高崎日日 7/1)

廃水鉄分使いヒ素除去
近畿大、九州大、鹿児島大など
(西日本 7/2)

九大主催で「大学サミット・イン・九
州」開催 世界十一カ国十二大学が参
加
(日刊工業 7/3)

発達障害児支援
検診で早めに兆候つかむ
大神英裕人間環境学研究院教授
(読売 7/4)

カンボジアからの留学生
カンボジアの未来見つめて
(読売 7/4)

呼子の活イカ 築地直送 特殊水槽
トラックで 九大と唐津市
(読売、佐賀、西日本 7/4、9、11)

病院内暴力への対策 警察官OBを
雇用 警報プザー設置 九大病院
(読売 7/5)

アキメババイオファーマ
九大医学部の技術を事業化
(西日本 7/6)

伊都キャンパス 朝採れ野菜販売
九大生サークル「菜都」
(西日本 7/6)

九大病院で筋弛緩剤紛失
(読売、毎日、朝日、西日本、日経、南日本 7/6)

九大と金山大 初の共同授業開始
教授ら往来
(朝日 7/6)

九大病院コンサート開催
(読売 7/6)

三菱ケミカル 九大と脳梗塞共同研究
治療法確立へ
(西日本、日刊工業、日経産業 7/7、9、11)

医を診る 参加型実習で実践知識
吉田素文医学研究院教授
(朝日 7/7)

ウイキノミクス 1丁駆使した外部と
の連携 篠崎彰彦経済学研究院教授
(日経 7/8)

「言語と文芸」和漢古典の世界」
文学館・九大人文科学研究院共催セ
ミナー
(読売 7/8)

お宝発見 炭鉱会社発行「炭鉱札」
九大記録資料館に保管
(朝日 7/9)

五色のセタうどん作り 九大の四十人
が挑戦 六本松キャンパスで
(西日本 7/10)

大川家具再生 産官学の挑戦
パリで好評 九州大学の協力
(朝日 7/11)

味覚センサー 味覚のデジタル革命
都甲潔システム情報科学研究院教授
(毎日 7/11)

バンクアラッシュのグラミン銀行と
九大が協定締結 農村支援
(日経、西日本 7/11、13)

健康のとびら 病気と心は切り離せない
医学部心療内科
(西日本 7/11)

九州デザインズピリット 職人の仕事
現代に 城谷耕生さん 池田美奈子
芸術工学研究院准教授
(西日本 7/11)

ユーザーサイエンス機構子どもプロジ
エクト 絵本カーニバル 四〇〇冊紹
介
(熊本日日 7/11)

障害者自立運動 支え合う社会に
知足美加子芸術工学研究院助教
(西日本 7/11)

災害時の体調管理 寒さ対策、水分
摂取が重要 橋爪誠医学研究院教授
(西日本 7/11)

参院選最大の焦点 憲法
数野祐三法学研究院教授
(朝日 7/12)

参院選 教育ビジョン示せ
八尾坂修人間環境学研究院教授
(西日本 7/12)

携帯の着うた 自己表現の響き
岩宮眞一郎芸術工学研究院教授
(朝日 7/13)

伊都キャンパスで減農薬野菜販売
学生サークル「菜都」
(西日本 7/13)

クラシック音楽で「フーマヤナ」表現
東南アジア理解の契機に
中村滋延芸術工学研究院教授
(西日本、毎日 7/13、14)

オーヘンリー著 ショートストーリー
セレクション 高樹のぶ子特任教授
(朝日 7/15)

社会が何を求めているかを考えて
開かれた大学への挑戦 梶山千里総
長
(西日本 7/15)

内視鏡手術が進化 穴開けず可能に
橋爪誠医学研究院教授
(西日本 7/15)

市民公開講座 高校生のための免疫
学講座を開講 生体防御医学研究所
(西日本 7/15)

台風四号 長引く梅雨
伊藤久徳教授(気象学)
(毎日、朝日 7/16)

生活習慣病とすい臓病
田中雅夫医学研究院教授
伊藤鉄英九大病院講師
(読売 7/16)

カーボンナノチューブ
お茶に溶ける現象を発見
中嶋直敏工学研究院教授
(日経産業 7/17)

原爆ドーム 固有の記憶未来に
直野章子准教授(社会学)
(琉球新報 7/18)

九大などが共同余震調査
新潟中越沖地震
(西日本 7/18)

「かくや」探査計画 「手鏡」飛ばし
裏側探る 並木則行理学研究院助教
(朝日 7/19)

米のナノテクベンチャー創業者
神部信幸氏 九州大で講演
(西日本 7/19)

九大病院東門前通り
アジアのようない雰囲気
(西日本 7/19)

電源装置大手のデンセイ・ラムダ
九大と連携し開発進める
(毎日、日刊工業 7/20)

九州大学学術研究都市
情報交流セミナー
(日刊工業 7/20)

工場排熱で水素製造 九大と企業五
社が成功 石原達己工学研究院教授
(西日本 7/21)

九州交響楽団の多面的な魅力
栗原詩子芸術工学研究院助教
(毎日 7/21)

「かくや」探査計画 月面探査機車の
実験 無人車の実現へ 小林泰三工
学研究院助教
(毎日 7/21)

九大生体解剖事件 東野さんが講義
(西日本 7/21)

「純化の思想家ルソー」を出版
細川亮一人文科学研究院教授
(読売 7/22)

「変貌する文学の中で 完 菅野昭正
著」作品を読み続けた重さ
波瀾剛比較社会文化研究院准教授
(西日本 7/22)

田んぼ力検定 参加者を募集
九大農学研究
(西日本 7/22)

小説時評
朝比奈敦「闇」高瀬スミエ「いわし
雲」
(松元常彦比較社会文化研究院教授
(読売 7/23)

ブルグラム言語「Ruby」生かし
産業活性化 九大・東京電力など
(西日本 7/24)

九州・中国ビジネス研究会
ビジネススクール
(西日本 7/24)

ものづくりアイランド九州
梶山千里総長 包括連携を推進
(日刊工業 7/24)

ゲームのヒット作は福岡発
官学も後押し 九大と共同開発
前田真知の財産本部准教授科学と
芸術の両方習得
(日経 7/24、26)

温暖化防止へ 前原市
九大生らも打ち水に参加
(西日本 7/25)

「教育力向上福岡県民会議」
委員に梶山千里総長
(朝日 7/25)

医療分野の人材育成
九大など十六件を選定 文科省
(西日本 7/26)

神戸での同意なし臨床試験
説明と同意義務づけを
笹栗俊之教授(臨床薬理学)
(朝日 7/27)

十一国立大学が合同説明会
九州大など 福岡市内で
(毎日 7/27)

子ども向け教室 水素について学ぼう
伊都キャンパスで
(西日本、毎日 7/27、29)

「海と船を知る教室」
伊都キャンパスで
(西日本 7/28)

景観を読む ボイドの戦略 引き算
のデザイン 土居義岳教授(建築史)
(毎日 7/28)

生命リズムで薬効最大に
大戸茂弘薬学研究院教授
(日経 7/29)

「美の旅人 フランスへ 伊集院静著」
画家の人生語る
後小路雅弘人文科学研究院教授
(西日本 7/29)

赤潮対策に水酸化マグネシウム
海への害少ない
本城凡夫農学研究教授
(日経 7/29)

新議員に望む 参院の役割果たせ
齋藤文男名譽教授
(読売 7/30)

九大学研都市構想
知事と市長が協力を確認
(読売 7/31)



九大生が案内する

世界のキャンパス

Rice University



アメリカ合衆国

教育学部 4 年

交換留学先

ライス大学

大森 万理子

おおもり まりこ



各国からの交換留学生の仲間と San Antonioへ旅行に出かけました。(後列右から2番目が大森さん)

“Never Stop Studying” なんていうランキングでトップ20校に入るくらい、ライスの学生は勉強に熱心だ。「九ヶ月という時間のなかでできるだけ多くのことを吸収して帰りたい、ラッキーにもここで勉強できることになったのだから。」そう思っていた私には、最適の環境がライスにはあった。興味があった女性学やアメリカ史の授業を多く受けていたが、毎回の授業で課されるリーディングの量は半端でなく、課題に追われる毎日だった。週に一度はクラリネットのレッスンを受けていて、それはリラックスできるし、気に入っていた授業の一つだった。ライスの学部の一つであるShepherd Schoolは全米でも評価の高い音楽学校であり、シンフォニーのコンサートやリサイタルがキャンパス内にあるホールで頻繁に開かれ、私も何度か足を運んだ。キャンパスを出てMETRO Railを使えばダウンタウンにあるJones Hallというシンフォニーホールに行くこともできる。またライスの近くにはMuseum Districtという美術館が密集した一帯がある。そこにはMEAHやContemporary Artsなど、展示の充実した大きなミュージアムがあり、私も友人と連れ立って訪れた。勉強に疲れたら、音楽と絵でここを癒せる、そんな素敵な環境だった。大きな出来事といえば、クリントン元大統領にドライラマ・・・多くの人物がライスの学生に話をしようと大学を訪れ、講演会が開かれ、話を聴きに行く機会があったことだ。簡単に飛び込んでくるそんな幸運が不思議だった。寮のご飯に飽きたら、友達がタイ料理やメキシコ料理、ときには日本食のレストランに連れ出してくれた。そんな風に過ごしていた時間の一瞬ごとが、ライスにいたときの私を支えてくれていたと思う。充実していただけに、気づいたら時間は飛ぶように過ぎていた。



ライスの建物はどれも綺麗な赤っぽいレンガ造りで、キャンパスツアーもよく見受けられます。

大学情報

ヒューストンはテキサス州で最大、全米で第四の大都市である。ライスはその大都市のヒューストン市内に位置するのだが、小さなキャンパス内は穏やかそのもので、学部学生数はおよそ二八八〇人という小規模である。一八八二年、ライスはWilliam Marsh Riceという大富豪により設立される。それが現在、“Best Quality of Life” “Lots of Race/Class Interaction” “全米一位とされ、また、電気工学と人文科学の分野においては二〇〇五年にトップ10の大学としてランクしている。

ライスの大学の特筆すべき点のひとつとしてCollegeの伝統がある。一八〇〇人の学生はそれぞれ九つのCollegeのいずれかに入る。Collegeにはそれぞれ個別のダイニングホールと寮があり、75%の学生はキャンパス内の寮に居住する。College独自の旗、Tシャツがあり、時折催されるイベントのときは競合含め、Collegeの伝統が根付いていた。

交換留学について詳しく知りたい方は、「九大生のための海外留学情報」(<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/study/>)をご覧ください。過去の交換留学生による報告書も大学毎にたくさん掲載しています。

こんな本
出しました

これからの キャンパス・デザイン

九州大学伊都キャンパスと
学術研究都市をつくる

編著者：九州大学新キャンパス計画推進室

発行：九州大学出版会(2007年7月刊 2,940円)



著者から一言

九州大学が新時代の大学像を全国に先駆けて実現する伊都キャンパスの構築と、都市と大学の連携によって実現しつつある学術研究都市づくりをまとめた書です。市民に開かれた都市型キャンパス、次世代技術の実証キャンパス、自然と歴史のオアシスキャンパスを目指して、大学の知を結集した新しいキャンパス・デザインとして示し、多くの関係者とともに取り組んできた姿を、ドキュメントとしてまとめています。

プレゼンテーションの 教科書

著者：脇山真治

(九州大学大学院芸術工学研究院 教授)

発行：日経BP社(2007年6月刊 2,730円)



著者から一言

本書ではプレゼンテーションを内容・構成、準備、技術、人間性等を含めた総合的な知的パフォーマンスととらえ、「プレゼンテーション関数」を通して紹介しています。聞き手の立場を尊重する姿勢を貫いているのも特徴です。日ごろ企画提案や業務報告、講演、研究発表をされるビジネスパーソンや研究者の皆様に向けた一冊です。プレゼンテーションは速習できる対象ではありませんが、地道に実践的にスキルアップを目指したい方々にはきつとお役に立てるでしょう。

編集後記

平成十八年度に新聞主要各紙に掲載された九大関連記事についてとりまとめました。総掲載数は九三一件で、前年度比で一二四倍でした。大幅に掲載数を伸ばしたのは、医(含病院)、工、法、農でした。詳細な解説は別な機会に譲りますが、各部署からの積極的かつ細やかな情報発信が功を奏しているようです。

皆さんが何気ないと思っている日頃の活動でも、案外記者の目線から見ると「ハッ」と思わせるものがあるものです。何かニュースソースがございまして、まずはお気軽に広報室までご連絡ください。

総長特別補佐(広報戦略担当) 高田 仁

九州大学はあと数年で百歳を迎えます。先日、九州大学百周年記念事業推進委員会の東京部会が開催され、委員の末席に連なつて出席してきました。各界で活躍の九州大学出身者の層の厚さをあらためて実感するとともに、事業への協力を仰ぐには、現在の九州大学が何を考え、何を求め、何を提供できるのかをしっかりと伝えることが喫緊の要事であるということも肌で感じてきました。来し方百年の歴史を踏まえ、行く末百年の計を見据えた稔りある事業にするためにも、「九大広報」の役割は重要だと思つたのでした。

編集委員・教授 高山倫明

九大の最新情報は 「九大広報」の定期購読で。

九州大学同窓会連合会では、九州大学の姿をご理解いただくため、同窓生や在学生のご家族の皆様をはじめ、広く一般の方々にも「九大広報」の定期購読をお願いしています。定期購読は年間六巻分(隔月発行)三千円でお受けいたしておりますので、ご希望の方は、同窓会連合会事務局までご連絡をお願いします。

九州大学同窓会連合会事務局

TEL.092-642-4328 FAX.092-642-2113

E-Mail alum.uok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

